

松波治郎著

女性への危険信号



納本



始



松波治郎著

女性への危険信号



4.5

特220  
173



女性への危険信號

松波治郎著



目次

妻よ！ 貧乏に泣くな……………一

正貧は響く——大晦日の切抜策——寧ろ貧乏を楽しめ——どん  
底の隣は？

女性への危険信號……………三三

はしがき——優越感の置き處——油斷大敵ビル女性——ポケット

目次

一

ト・マネーと湯——虐待の手に危く女銀行員——名士の名前を  
並べて

恩師への悲戀と少女……………五七

神の如き戀心

處女の自殺種々相……………八〇

心中生残りの女は語る……………九一

決意の瞬間——死出の始末——おゝ天國へ——現實は悲し——  
人の情に更生の道へ

産褥三態……………一〇八

去つた五人の女性達へ……………一三六

悲しき病を持つたT子さん——眞珠を泥沼に求めたK子よ——  
聰明過ぎる奥さん——生人形のF子さま——知られ過ぎてたJ  
子君よ

流浪線上の處女……………一四六

絶たれた感激——双面の肌——恐怖の對象——現實の人魚——  
生き別れの幼なき娘へ……………一八八

苦難の人生記録……………二〇二

血に咽ぶ惨劇の一夜——悲惨な一團——不具の身に一家を負ふて——荆棘の道は何處まで続く

支那に食はれた女達……………二三〇

結婚の進化——滿洲事變の口火——張宗昌の第十七夫人——ダ  
ンサーと段昌世——花恥しき女賊末子

全國女氣質……………二五〇

中部地方美人系「美濃、尾張」氣質——關東婦人と静岡女性——

東北、北海道の女性——北陸、信越地方女人色——近畿、中國、九州色

流浪に賦す……………二八三

——清水三重三裝幀——

# 女性への危険信號

松波治郎著

妻よ！ 貧乏に泣くな

正貧は響く

大晦日愚なり元日尙ほ愚なり

と俳聖子規は喝破した。けれども臺所で掌を合せて借金取りに詫びて居るお前にとつては、此の俳聖の言葉に微笑を感ずることは出来なからう、いや、そんな世迷言が、(さうだ、世迷妻よ！ 貧乏に泣くな

妻よ！ 貧乏に泣くな

二

言と、とれるであらう、云つて居られた子規と云ふ人が羨ましからう。

大東京市に編入されたと云つて、近所が、国旗を出したり提灯を吊るしたりした、あの時、お前は、もみくちやの紙に赤インキで圓を描いて小さい紙旗を拵らへたね、子供が、

「自宅には国旗がない！」

と騒いだものだから。そして、お前は、それを門口に貼つたな、すると、子供が、

「うちの国旗ちいちゃいのね」

と云つたね、するとお前は臺所にも、座敷の中にも小さい手製の紙の国旗を貼つたね、

「嬉しいな、うち、国旗澤山あるね」

と子供が、跳ね廻つた時、僕は、顔を見合せて、眼に涙を浮べたらう、しかし、笑つたね  
朗らかな泣き笑ひを！

あれを、お前は幸福と思はぬか？ 僕は心から幸福だと思つた。紙旗を作るお前の心が、何

と云ふ富だらう、さうすら思つた。

働けど働けど、わがくらし

らくにならざり 凝つと手を見る

殉情の詩人、石川啄木は歌つた。どうだ、全く、働けどく僕達は樂には成つて居ないのだ、今月こそは月末に、どうにか頭を下げずに済む、と思ふと、すぐに何か不時の必要が起つて来る。その度に、僕は

「あゝ！ 今月も駄目か！」

と嘆息したね、けれども、此の間、電車に乗つて、ふと前の人のお話に小耳を立てゝからは、僕は、ちつとも悲觀しなくなつた、それは獨身らしい若い男だったが、今月こそは、どうにかやれると思つて安心した其の翌日、突然、電車が、がらつ、と揺れて入れ歯を噛み毀したと云ふのだ。その爲め齒醫者に三十圓取られて、會社も休んでしまつたと云ふ、しかし矢張り休

妻よ！ 貧乏に泣くな

三



妻よ！ 貧乏に泣くな

四

んで居ては成績が上らぬ、と云ふから保険の外交員でもあらう。又、出たさうだ、處が契約者が立替へて拂込めと云ふものだから責任額を充たす爲めに立て替へて拂ひ込んだのださうだ。處が、それが、ちつとも金を呉れないと云ふのだ、つくづく世の中が厭になつたと零して居た。それを聞いた時、僕は微笑を浮べたよ、何故かと云ふに、お前、倅に僕達は電車が揺れても噛み毀す入歯を持つて居ないだけが幸福ぢやないか、そんなに立替拂ひをする必要のない職業だ、あゝ、まだ荷が軽いと、その時僕は思つたよ、どうだ、ものごとは思ひやう一つだらう。

三月溜めると瓦斯も電気も止まる、どうだ、あの兩方一度に止まつてしまつた時は！ 瓦斯屋が瓦斯供給を止めによつて來たね、すると、お前は、

「誠に濟みません、どうぞ止めて行つて下さい」

と詫びた筈だね、瓦斯屋は返事もせず瓦斯を止めた。もう夕暮れだと云ふのに電気は切られて居るから點かない。それで坊やが、

「お父さん、暗くなつたからおうちの電気をつけませう」

と云つたね、おゝ、と云つて僕が立ち上つて臘燭を點けた。

「おうちの電気、ぼか／＼するのね。」  
と子供が云つた。

あの時、僕達の沈黙、それは悲痛だつたね、しかし、それを見た瓦斯屋が、

「あの、一寸御注意しますが——」  
と聲をかけて、

「こゝを、かうすれば瓦斯は相變らず出ますよ、次のメートル調べ迄一ヶ月ありますから其の間に使つてはいけませんよ」

と優しい言葉で云つたらう。あれは、使へと云ふ謎なのだ、一ヶ月は大丈夫ですと云ふ暗示なのだ。

妻よ！ 貧乏に泣くな

五

妻よ！ 貧乏に泣くな

六

「いゝえ、決して、そんな怪しからぬことは致しません」

とお前は云つたね。その時、瓦斯屋は何と云つたか？

「本當にお困りか、圖々しいのか、私達には一眠で判ります」

それから、

「かわい、坊つちやんですね、あまり苦勞をさせてはいけませんよ、はいちやい」

と愛嬌よく出て行つたらう。

あの心、あれが僕達へ何と響いたか！ 電燈も瓦斯も止められてしまつても、ちつとも悲し

くも淋しくもなかつたらう、誠實にやつて居て、それで運がまだ向かないのだ、と二人共、安

んじた、樂な心持ちだつたらう。

## 大晦日の切抜け策

妻よ！

お前は去年の暮れを忘れぬであらう。何から何まで派手づくしの、お向ふの家では、月末になると御主人が御旅行と云ふ譯だつたね、いゝや、お向ふの家でも苦しい内情は、こちとらと同じだつたさうな。

お向ふの主人は、暮の一日前に、浅草で活動寫眞を見て廻つたさうだ、みんな借金のがれの爲めさ、どの映畫も、どの映畫も面白くなくて、終ひには足が冷へて仕様がなかつたさうだ。

しかし、なか／＼家へは寄付けない。それで安旅館に泊つて、又、翌日は、ぶら／＼と、東京市中を師走の風景の見物と已むなく洒落れたさうだ。そして、歩き乍ら、今頃は、借金取にうまく妻が「主人旅行中」を利用して辯解して居るだらう、そんなことを想像し乍らに、在る金で、正月の用品を、ぼつ／＼買つて居たのだと云ふ。

そして、大晦日の晩は、箱根山を越したのださうな。つまり、沼津邊りまで行つて、引つ返

妻よ！ 貧乏に泣くな

七

妻よ！ 貧乏に泣くな

八

して来ると元日になると云ふのだ、だから、沼津土産を買つたらう、

「え、よんどころない用で今朝歸りましたのよ——」

と、奥さんが元日の朝、持つて来てくれた。

ところが、僕達だ、僕達は、あの晦日に、本當に一錢の金もなかつたね、しかし、あの朝、

お前には確かに話した筈だ。

ある家の主人が、どうしても暮れの借金が拂へない、さりとて逃げかくれも出来ない、それ

で、白張の提灯を戸外に掲げて、主人が其處へ坐つて、

「どうにも成りません、勘辨して下さい」

と誠の心から、詫びたと云ふ話を。

すると、掛取連は、正月の飾り一つなく、餅の匂ひもしないのを見て、みんな許してくれた

ばかりでなく、借金のある米屋が、僅かばかりだが——と餅を裏口から持つて来てくれ、酒屋

は酒屋でお神酒を持つて来てくれ、なほ、その上に、正月になつてからは、出入の商人達が仕事さへ心配して持つて来て呉た話を。

すると、お前は頷いた。僕は、借金が来たなら、土下座して詫びやうと、心構へをして居た。

しかし、一向に借金取はやつて来ない、土下座する筈の僕も力が抜けた。

「何と云ふ今年の晦日は閑散なのだらう」

そんな、呑気な氣で僕は居た。

だから、お前が何時の間に歸宅したか知らなかつた。

さて、臺所へ出て見ると、お前は、こつこつ、お正月の馳走の仕度をして居るではないか。

「おや？」

僕は驚いて、お前に問ふた。

妻よ！ 貧乏に泣くな

九

妻よ！ 貧乏に泣くな

一〇

「一體、どうしたんだ」

その時、黙つて、ふり向いたお前の顔には涙が光つて居たね、お前は小さい聲で、

「世間には鬼は居ません」

と感激して云ふ。

「どうして？」

追及してみると、借金取の來ぬのも、あたりまへだつた。お前が、一軒／＼詫びて廻つたと云ふことだ。

「わざわざ忙しい中を足を運んで貰はぬ中に——」

と云ふお前の心掛けが先方へ反射したのだな。

「困るには困りますが、已むを得ません」

と許してくれて、

「お正月のお仕度は？」

と訊ねられたと云つたね、その時、お前が、

「正月は、あたしの家には無いので御座いますの、晦日の拂ひも出来ませんもの——」

と云つたさうだ、そしたら先方で、

「坊つちやんが、いらつしやるのに」

と、子供に、かこつけて、正月の仕度のものを貸してくれたと話したね、そして、みんなが、

「來年は御運の開けるのをお祈りします」

と云つてくれたとね。

「ば、馬鹿な、わざわざ厭な眼を見にくく奴があるかい！」

僕は、投げつけるやうに云つたつけ、しかし、部屋へ来て、壁に向つて泣いたよ。

妻よ！ 貧乏に泣くな

一一

妻よ！ 貧乏に泣くな

一一

「幸福だつ！ 幸福だつ、この幸福を味ふ奴が世の中に何人ある！」

勿體なかつたのだ、お前の心の中にある真珠が！ あの時、僕は手を合はせて拜んで居たよ。

正月になつて、僕は相變らずの襦袢着物だ。

お向ふの家は、御主人御旅行中で大晦日の債鬼を逃れて、江戸つ子は、先づ松の内は借金取りには来ないと極め込んで、一家立派に着飾つた。

そして、ふと、元日、お向ふの御主人がお子さんを連れられたのと、僕も子供を連れて散歩に出て一緒になつた。

着飾つたお向ふの父子と、見窄らしい僕達と、まるで、比較にならない。その時、僕は、子供に貧乏させて濟まない——と考へたね、勘忍してくれ、と心で詫びたね、父の働きのないのを！

けれども、坊やの歸りの云ひ草がよかつた。

「おかしいね、坊やのおべ、は穢いのに、みんなが坊やにばかり、おめでと、云つたよ」

全く、その通りであつた。着飾つたお向ふの人達には「ふん」と鼻白んで、そして、みんなが、わざと町重に、僕達父子に

「おめでたう存じます、相變らず御最負に！」

と云つてくれた。その時、どんなに晴れ晴れと、何より此の僕の顔が、お正月らしくなつたかを、お前は忘れはせぬだらう。

### 寧ろ貧乏を樂しめ

乾うどんを十錢買つて来て、味噌で煮て食べると二日あつたね、うまかつた、乾うどんしか食べられないなど、云ふ情けない氣は、ちつともせなかつた。

けれども、子供が、

妻よ！ 貧乏に泣くな

一一

「お母さん、短かい御飯がたべたい」と云つた時には弱つたね、子供にだけは、米を食べさせやう、暗黙の間に二人の心に浮んだのが、これだつた。

貧乏は嬉しいものだよ。貧乏なればこそ、云はでも通ずる心がある。貧線に一生懸命、喘いで居る時に僕達は何を考へたらう。何を思つたらう。

前進！ それだつた、向上！ それだつた、奮闘！ それだつた、みんな、生き／＼したもののばかりだつた。

お互ひに疑惑や嫉妬が働いたか知ら？ いや、全幅の信頼が、信頼しやうともせず生じて居た。

お前は、僕の努力が、思はしい効果のないのに同情し、僕は僕で、お前が貧しい厨で、何を煮やう、と考へる姿に、堪らない愛を感じた。

人間を本當に結びつけて呉れるのは貧乏だよ。

矢つ張り、大晦日だつたね、僕が新聞社の以前同僚だつたSの家へ、せめて餅代でも融通して呉れぬか、と思つて出掛けたのは。

Sの家は、もう、すつかり正月の仕度が出来て居た。立派な松飾りもあつた。Sの妻君が産婆さんで手廣くやつて居るのでSは浪人しても平氣だつた。

處が、行つて話して居るうちに驚いた。産婆をして居る妻君が、

「碌すつば、子守りも出来やしませんよ、意氣地のないつたらない油蟲ですよ」と、Sを、こき下ろして居た、また、SはSで、

「へん、何をやつてやがるか判るもんか」と云ふ調子だつた。

僕は、その時、金の話など持ち出さずに歸つた。いくら、正月の準備が仰々しく出来たつ

て、あの心で、いつ、正月が夫婦の間に來るものか、

「歳の中に春は來にけり」

僕は、僕達の心の合致を考へて、この時、お互ひの心の中に、いつでも正月が來て居ることが嬉しかった。貧乏だよ、貧乏の有難味だよ。

白亞館に納まつて、奥さんは毎日自動車で、帝劇、三越、歌舞伎、ダンスホールと遊び歩いても、肝腎の旦那さんが、疑獄事件で、有難くない別荘へ行つて居るなどに、何處に幸福の影があらう。

しかし、僕は、お前に詫びねばならぬ點がある。それは、僕の曾祖父の話だか、曾祖父が浪人して貧苦の極に達した時、土釜と土鍋だけより持ち合せなかつた。或日、その土鍋で雑炊を焚いたのだが、永らくの貧乏で、曾祖母は、すつかり、ヒステリックになつたものと見へ、何かしら小さい口論の末に、矢庭に、その土鍋を庭へ叩きつけてしまつたと云ふ。

すると、曾祖父は偉らかつたね、すつくと立ち上ると土釜を抱へて出て行つた。

しばらくして曾祖父が歸つた頃は曾祖母もヒステリーが納まつて居た。それで、

「あなた、土釜を何處へ持つていらした？」

と問ふた。曾祖父は、にこ／＼して、

「なに、お前の怒りが激しいので、此の次、土釜を破られては御飯を炊くことが出來ない、女房の怒りの沈まるまで濟まないが預つて下さい、と、お隣りへ土釜を預けて來た」

その答へを聞いた曾祖母は、

「まあ！ 何て呆れ返つた人だらう」

と云つて、お隣りへ、顔赫め乍ら土釜を貰ひに行つたと云ふことだ。

情けない哉、僕には曾祖父ほどの度量がない、貧乏でヒステリックになるのは、お前よりも僕の方が先きらしい、時々、不遇逆境についても痼癪が起きる、しかし、その度に、お前は

妻よ！ 貧乏に泣くな

將來の僕を信じて反つて慰めてくれた。お前が曾祖母のやうであつてくれれば、まだいゝ、曾祖父程のユーモアを持ち合はせぬ僕は、お前のユーモアで反つて貧乏を樂しませて貰つて居る。

貧乏は樂しむべきものだ、貧乏を樂しませて呉れるのは家庭のユーモアだ。

よく世間で云ふ。腹からの貧乏人は貧乏に堪へられぬ、と。

それは、世間に對する僻みが働くのだ、貧乏だから馬鹿にしやしないか、と自分勝手に思ふのだ。世間は、そんなに他人の貧乏などに關はつて居るものではないのだ。それに、此の言葉は、貧乏に、いぢけたものは貧乏が樂しめないといふのだ。正貧は樂しいものなのだ、今更ら逃水和尚の話を持ち出すまでもなく、貧乏こそは赤裸々の自分を自分に見せてくれる絶好のチャンスであることは、お前が體驗した處だらう。

「貧乏の味つて面白いのね、借金のことわりなんか、まるでゲームよ、笑つて歸すか、怒つて歸すか、ほゝ、あたし大分腕が上がつてよ」

「女外交官になる資格が出来たと云ふ譯だね、はつはつは」

バットを半分にち切つて喫つて居る僕が笑つたつけね、

貧乏には深い味がある、興がある。二度と味ひたくも味へぬ尊いものがある。

妻よ！ 貧乏に泣くな、本當にさうだよ。

### どん底の隣は？

しかも、お前、貧乏は有難いものだよ、徹底的に貧乏になつた身には、親友面した嘗つての悪友が、すつかり清算されたではないか、善玉、悪玉を簡単に明白に撰り分けてくれたではないか、先づ第一に判斷力を根本から植ゑつけてくれた。

そればかりではない、貧乏は、この腕が、この足がどんなに力があるか、この頭が、どんなに働いてくれるかも教へてくれたらう、金の無くなるに従つて心細かつた過去が、今では、お



妻よ！ 貧乏に泣くな

二〇

かしいではないか、無いにまざる氣樂さはない、全くだ、かうなると貧乏禮讃になるが正貧は禮讃してもいい、貧乏して僻み、いちけるのは、濁貧だからだ。勝手に貧乏してる——と云ふ言葉がある。誠實に働きもしないで、好んで貧乏して居る奴こそ、醜の醜だ。

一心にやつて志成らずして、貧乏して居るのは天の與へた試練で尊いものだ。この試練は受けやうたつて、なかく受かるものではないのだ。

それに何よりも貧乏をすると世間がすつかり判る。

妻よ！ 貧乏を泣くな。

貧乏は、どん底だ、しかし、このどん底の下に底があるか？ 無いだらう、正貧に一步一步努力して、これからは建築のみだ。貧乏は土臺石だ。

世の中の多くの離婚の實例は何か？ みんな、物質に憧れて人物を見ず、金のある時、調子のいい時に結婚したからだ。乏しくなると淋しくて頼りなくて一緒に暮らされぬのだ。

それが、お前、貧乏を共にしたものは、これからあるのは、たゞ富への一途だ。一つ一つ、樂しみが殖へて行くのだ、一本／＼柱が立つて行くのだ。

どん底の貧乏からして、始めて創造の愉快さがある。

びちつ、と緊張した氣持も貧乏なればこそだ。人生への退屈、夫婦間の退屈、それが、どんなに悲劇を醸すか、お前はよく知つて居るだらう。

小村侯も西郷南洲も渡邊華山も、みんなあの人達に貧乏があつたからこそ伸びられた、と云つても過言ではなからう。

うつかりすると、世の中と云ふものは、何にも知らずに一生を過ごさせてしまふものだ、腹の底からの感激一つ與へて貰へずに——。

其處へ行くと貧乏は、一つ一つ、出て来るものが、みんな感激の材料ではないか、有難いとだ。

妻よ！ 貧乏に泣くな

二一

妻よ！ 貧乏に泣くな

二二

支那料理を三日續けて洋食に變へた味よりも、芋粥や乾うどんを一日食ひのばした味の方がもつと愉快であつたではないか。

妻よ！ 貧乏に泣くな。

貧乏は出世への、幸福への第一段階である。同じものなら、生なか、中途の段階より第一歩から始めた方がよいのだ。

それに貧乏のどん底の隣の扉は何か？ 幸福だ、富だ、扉の前迄、もう僕達は來てるのだ。

妻よ！ 貧乏を楽しめ、そして次ぎに出會はす富への心構へを練らう！。

## 女性への危険信號

はしがき

或人が私に云ひました。「女はつくことは易いが離れ際が難かしい」と。甚だ失禮な言葉であるが、何かしら現代の女性の核心を擲んでゐる處がないでもありません。

しかし、此の人はまだ、離れ際が難かしいと云つて居るだけに良心の影を認めます。けれども近來の多い結婚詐欺などの問題を見ると、不とき千萬にも、離れ際が難かしいどころか、世にも尊い女性のハートを踏み躪り、吸ひ盡して、びよいと消え失せて居る。心外とも無念とも云ひやうがないではありませんか。

私は云ひたい、女性が其の神の如き純心さから對手の男の云ひ分を信ずるのはよい、しかし

戸籍謄本位は、いざ結婚しやうと云ふ意志の働く一歩前に取り寄せてみるべきでせう。そして、そんな馬鹿々々しい結婚詐欺にも掛らぬ筈であるし、もし戸籍謄本が變造でもされて居やすまいかと思へば其の近親へ一寸問ひ訊せば判ることです。賢博士などは極く簡單だと思ひます。出身學校へ一寸問合せば、ばら／＼と卒業生名簿を繰つて正直に返事してくれませう。如何なる場合でも、急いで仕事を仕損じます、蟹さへも慌てれば穴へはいれないと云ふではありませんか、戀にしても結婚にしても神聖な人生の一大事です。失敗した戀、失敗した結婚から立ち返ることは容易ならぬ女性に取つて難行苦行です。そんなことを、自ら求むるの愚を、しなくてもいい筈です。

それから、戀愛の場合だつて、男性と云ふものは女性を獲得するまでは必死の努力をするものと相場が極つて居ます。それを、なまなか買ひかぶると飛んだ失敗をします。男性には女性に對して戀愛の四十八手の裏表があります、當然女性にだつて、それに對抗する四十八手の裏

表がなくてはならぬ筈ではないでせうか、いゝ加減に陥落するなどは勘くとも大和撫子の姑券に關します。

昔、男三人ありけり、その三人、みな／＼一人の女性を戀したり甲、なる男性は彼女に朝夜の行届きたる親切配慮涙の出づべきものあり、乙なる男は彼女の欲するもの何一つとして與へざるなし、丙なる男のみ、他の女性と會ふ爲めに彼女を二時間も待ち呆け食はせたり、さて、彼女は誰れの手に落ちたるや——とは戀愛のメンタルテスト、戀愛の勝利者は勿論丙なる無禮なる男性であります。心すべきではありませんか。

聰明、叡智は時に其の聰明を過信し、叡智を過信します。明朗のプライド保持に過ぎてしまひます。念には念を入れよ——私は悪いことは申しません。

さて、かうして判り切つた事が反つて判り難い。いろ／＼な問題に打つ突かります、女性への危険信號の必要が其處にあります、では以後實例を擧げて、赤いシグナルを掲ぐべき處に掲

げませう。

### 優越感の置き處

かう云ふ事實があります、大阪の中央郵便局爲替金五萬圓を日銀大阪支店から引出して拐帶逃走、まる七年の間、行衛を晦まして居た元通信書記前川功三が高尾山中で自殺しました。

拐帶逃走後東京で娶つたタイピストだつた内縁の妻×齋のき子は、足掛け七年間同棲し乍ら夫が、そんな大それた犯人であるとは露些かも知らなかつたのです。しかも自殺の遺書に、罪を懺悔し哀切極まる心情を物語つてあるのを見て、のき子は眼を泣き腫らし乍ら新聞記者に語つたのです。

「私は今の今迄、夫がこんな大罪を犯した人とは知りもせず、目黒署で云はれた時も、それを信じませんでした、七年前ふとしたことから村上（當時前川の自稱）と家庭を持つて思へば樂

しい夫婦生活でした。それがこんなことになり世間を騒がせて申譯ありません。しかし、どんな罪人にせよ七年も連れ添つた夫ですから死體は私が引取つて弔ひをしたいと思ひます。私は世間が何といはうとも最後まで夫としてみまもりたい念願です」

どうです、そこそ義太夫の文句にあるやうに、

「女は一度、我夫と思ひ込んだら魔王でも、たとひ鬼でも變化でも……」

の心境で、たとひ、恐るべき拐帶犯人と知つた日であつても、のき子には、それが爲めに永年を詐られた恨みはないのです。しかも、其の腐爛した死體の胸にダリアの花を捧げ泣き崩れた此ののき子の心情に何かしら、そとろに、ものあはれと美しさが感ぜられるではありませんか。

しかし、之と相反して、嘗つて高圓寺、中野一圓に素晴らしい噂の種を蒔いた昭和の天一坊、相○太郎に欺かれた女性、それから、つい最近、山口懸防府町で捕はれた質醫學博士佐々○一

義こと種本×平の爲めに結婚詐欺にかゝつた千葉縣の大素封家大×光一郎氏長女の順子さん（假名）は、新聞の報ずる處に従ふと、悔恨と呪とに泣き暮れて居られるやうです。

其處です、其處に女性への危険信號の必要があります。いつの場合でも欺くものは狡智に長けて居り、欺かれるものは到つて純心なことは申すまでもありません、信じ易い爲めに騙される、信じ易い女性——私は、それを世にも尊いと思ひます。疑の心深いのは、怒られるかも知れないが、由來女性の通有性とされて居ます。その中に、珠玉のやうに光る純心な信じ易い女性を欺くとは何たる奴でありませう。何と云ふ罰當りでせう。が、その珠玉のやうな女性が欺かれることは、又一面、何ともかとも云ひやうのない残念さ、口惜しさを異性は素より同性も感ずるに違ひありません。

だが、しかし、此處に考ふべきは欺かれ騙される人達が、決して無智な人達ではないのです。いゝえ、大概は、充分犯人に満足を與ふべき、ものの力を持つて居る方々です、しかも、イン

チリです、叡智ある人達です、時には傑れた才女でもあるのです。

それが何故？ 何故、そんな後から考へて見れば、如何にも下らないと思はれる詐術に易々として掛つてしまふのでせうか？、此處が女性の人生への大切な踏切であると申さねばなりません。

同じ犯人に騙され乍らに、×齋のき子さんには悔ひがなく、他の女性に悔があるのは、氣持ちの上に、生活態度の上に非常な隔たりがあるからです。のきさんは二度の結婚生活に破れて、慙くとも生活の眞髓に觸れて居ます。人間と云ふものを見やうとして居ますけれども、他の騙された人達は、その人達の持つてゐたプライドに誤られたものと私は思ひます。

プライドの置き換え、それが重要なことです。

それは男性も女性も共通の心理ではありますが特に女性は、何かの優越感がないと暮せない傾きがあります。卑近な例を取りますとあの貧民窟、或は長屋の井戸端會議なるものを御覽な

さい。喧々囂々として、それは一體何を云つて居るのか、と云へば近所の噂を借りて、其處に一つの優越感を見出し、自己の優越を互ひに主張する處に、あの喧々囂々が生れるのです。さて、しかし、その優越感こそ人間の向上する礎石です。無くてはならないものではありません。然し乍ら、其のプライドを若き女性は、人の本質に置かねばなりません。決して脱ぎかへられる裝飾の上に置いてはなりません。

立派なラバアを持ちたいこと、夫を持ちたいこと、何人もその要求に變りはありません、たゞし、騙される多くの女性が或は醫學博士と詐稱し或は華族の息子と詐稱するものに、如何にも簡単に騙されるのは、つまりは其のプライドが、人の本質ではなく、さう云ふ形の上にあるからです。

ずつと前の話ですが、私の友人生方敏郎氏の賢者が信州の旅館に現はれたことがあります。處が、そのニセ生方敏郎は旅館の娘を永い滞在中に妊娠させ、その上宿料を踏み倒して逃走し

ました。

旅館の主人は驚いて、生方敏郎氏を東京の邸に訪ねたのです。

「先生、いらつしやいますか？」

の質問に、無雑作に玄關先へ出て来た生方氏が例の通り極度の近眼を、しよぼ／＼させ乍ら、

「僕が生方ですが——」

と云ふと、旅館の主人は、

「馬鹿を云つてはいけない。生方先生は、わしの娘が惚れるやうな風采の立派な堂々たる方だ」と主張するのです。其處で面喰つた生方氏の種々な説明で、旅館の主人は、やつとニセ者にしてやられた！と地團駄踏んで口惜しがつて早速訴へを起しました。

間もなく、其の犯人は捕まつたのです、がさて、此處で注意すべきは旅館の娘の態度です。

「たとひ、ニセ者であつても、あたしはあの人が戀しいのです、すつかり罪の償ひをして出て

来て下さるのを待つて居ます」

とのことだつた。風采にラヴしたのだつたら、徹底的に其の風采に打ち込んで、これだけの覺悟が出来れば、私はいゝと存じます男も女も、變な動機ではあるが、双方共救はれるからです。

——が、ニセ醫學博士事件の順子さんは新聞の報道通りならば始めは神戸で船員委のスマートなスタイルの彼に參つて、こちらから訪問して行つたかに見えます、だつたら、其の風采に打ち込んで、浮はつた氣持ちでなく、眞剣に自分の大切なもの迄捧げてしまつたのですから、うんと心を打ち叩いて、眞實の生活へ踏み入るやう努めたなら、或は、もつと早く其の本體も判り、前後處置も出来たらうと考へられます。

如何なる巧妙な偽瞞でも、偽瞞は結局偽瞞です。一つ、深く注意したなら除は隨所にある筈だつたのです。人を見やうとせず、向ふが、喜びさうな形の上のことを極端に強調するのを

鞠呑みにしたり、殆ど常識では判斷のつきさうもない出世の話をした時に、これに有頂天になつて進んではいけません。

あまりに成功しさうであつたら、それは赤いシグナルと心得ていゝでせう、一寸待て——其の時、向ふの姿が尻尾があるかないか、はつきり見極められます。

### 油斷大敵ビル女性

嘗つて、丸ビルに處女なし、と迄云つた人があります、これは、あまりに丸ビルの淑女を侮辱した話で申譯ないですが、丸ビルに勤務する程な、いづれかと云へば職業戦線でも、潑刺として理智に富んで居て、何もかも判つて居さうな聰明な女性達が、どうして、さう迄云はれるに到つてしまつたでせうか？

よく、映畫のストーリーにも、小説にも、タイピストや女事務員が、往々にして使用主たる専

務とか、社長とかに、ついで危険の域を通り越させられてしまふのが、よくあります。

しかし、私はそれも危険の一つではあるがそれ以上に、危険なものへの信號を掲げねばなりません。

何と云つても女性には上には従ふと云ふ美德を持つて居ます。だからして生活の保證の中心である人から或種の努力をされれば、それに感激して動く、いちらしい氣持ちもあります。それは否みません。さうした女性の弱點へのしかゝつて來る力ある男性をも憎みは致しますが、女性の多くの危険は、自ら求めて行く處にありはしないでせうか。

専務とか、社長とか、支配人とか、さう云ふ人達の前では、孰れかと云へば女性は第一に堅くなつて、無意識的に身にも心にも緊りをして居まして、その態度が知らず知らず防禦の形になつて居ります。だからして、此處では、そんなに危険信號の旗を振らすともいゝ氣がいたしません。

が、危険は、いつ如何なる場合でも、油斷のある處に存在します。

第一は、をばさんです。ビルディングの掃除などをするをばさんです。あゝ云ふ人達が綺麗に女性に何と言葉をかけますか。

「まあ、いつ見ても、あなたは何と云ふ美しくしきでせう、丸ビル第一だね」

「まあ、いやなをばさん、あたしなんか、誰れもかまひつけて呉れませんよ」

と、おほい、と笑ひ乍ら、コンパクトを叩くとき、もう、彼女の心に油斷が出來て居るので

「暑いから、お化粧だつて、すぐに崩れて仕様がないのよ」

と、一寸、眉を擧めて云つてもみたくなるではありませんか。

「いゝえ、あなたなんか素顔の方が美しいよ、色が白くてさ、學問があつて、本當に女だつて、あたし惚々させられてしまふ」



など、をばさんは、工合よく煽て上げてくれるのです。さて、さうなつて来ると、つい、その、をばさんとは親しみが増して来る。大體がビルディングのをばさんだ、と、大丈夫安心してしまつて氣を許してしまつて、さて其處が女同志、朋輩と、氣分の衝突でもすると、ついそのをばさんに訴へることゝなります、さうなると、をばさんから、他の會社の女性の話が出る。賞與の話、給料の話、勤務時間の話、上役の話、それから、ついでに住所も境遇も話し出してしまふ結果となります。

そのうち、ふと、をばさんは云ひます。

「きたない家だけど、一度遊びに来ませんか、呑氣な暮しですよ」

なんて誘ひをかける。更に、

「時に、六階の××はいゝ會社ですよ、あそこは、とても俸給がよくて、みんな生々していますよ」

と来る。彼女が感心して話を聞いて居ると、

「あそこに、いつも茶色の洋服を着た、それ美男子が居るでせう、あれは××大學出で、とてもいゝ家柄の人ですよとさ」

と、そろ／＼男性の噂が持ち出される。

彼女が、それに興味を持つやうな返事でもしやうものなら、をばさんは、毎日、小出しに、彼女に彼氏の印象を、勘しづゝ、勘しづゝ與へて行く。これは非常に効果のあるやり方です。

その時は既に男性の手からは、をばさんに自分の報酬が出してあるでせう。そして、そのをばさんが、彼女を拉して、そして彼氏の手に渡すときは、もう手遅れです、とつづくに危険を通り越して、はかない姿となつてしまつて居ます。

心すべきは、何の緊張味もなく、心許して話せることが危険です。不平を訴へる時代はまだよろしい。假りに、おばさんの口から誰れか男性を讃め稱へる言葉を聞くやうになつたら、

ストップ！すべきであります。

### ポケットマナーと湯

華やかな洋装はしても、悲しい哉職業戦線の女性にはポケットマナーなるものには極めて縁  
薄きものと、失禮乍ら申上げて宜しからう。

其處です。此のポケットマナー難に依つて、誠に悲しく處女へグッドバイした女性があり  
ます。

某會社の事務員中では最も年輩も若く美しく、會社中その女性に慕ひ寄せらるるもの尠し、  
とまで云はれた、そして暗々裡に其の女性の處女を互ひに守るやうな形になつて居たほどの彼  
女でした。

ところが、ふと晝食の、おそばの代にです、細かいものがなくつて——と云ふと體裁はいゝ

ですが勿論大きなものもなくつて、ハンドバックの中はコンパクト其他の七つ道具にハンカチ  
ーフだけ、まあ、電券、省線のパス、それつ切りらしかつた時があつたのです、其處で、平素  
何がな親切にして呉れる四十代の小使さんに、

「あたし、弱つたわ、細かいものがなくつて——」

とやつたものです。處が、その小使さん、

「いゝえ、喜んで立て換えさせて頂きます」

と來た。

それが一度が二度となり二度が三度となりつい便利がいゝから、さうなつてしまつたのです。  
其處で私は云ひます。由來、武士は食はねど高楊子とは、あながち、丁髷時代の金言ではな  
く、立派に今日の淑女にもあてはまるものだつたのです。

細かい借金はするな——これが處世の祕法ださうです、誠に味ふべきものです。

遺憾乍ら、彼女は不幸にして此の金言を存じませんでした。いや、聞いたことはあつても忘れてたのかも知れません。

さて、さう云ふ風になつた小使さんが、債権者らしい顔も見せず、益々彼女に親切を盡すのです。

女事務員は、時として、客に茶の給仕をもさせられます。さう云ふ場合、小使さんが要領よく茶の世話をしてくれることが、どんなに嬉しいことせう。

それに、何と云つても心を許して話しよいのには小使さんです。彼女と小使さんとは、小使室で、いとも朗らかに話し合ひました。小使さんは、充分、彼女を女事務員なりとして尊敬も拂つてくれますし、彼女も對手が小使ならば、充分の優越感を以て相對することが出来るのでした。

——が、此處で古臭い言葉を使ふのは勘辨して下さい。遠くて近きは男女の仲——なのです。

彼女は無意識であつても、彼女のイットはやはり小使さんに響きます。小使さんだつて何不足ない一人前の男です。無理はないと思つても差支へないぢやありませんか。

で、その小使さんの心安だてが、たま／＼彼女の無理な缺勤の辻褄を合はせてくれたことでもあります、それは勿論、たのもしいわ——と云ふ感じを彼女に起させました。

さて、此處まではよかつたのです。此處で、すつかりポケットマネーの清算をつけてしまへば、それは、それでいゝのでしたが、不幸にして彼女は深入りしたのです。

と云ふのは會社では宿直員の爲めに風呂を沸すのでした。夏暑いのに、一風呂浴びることは女性にとつて有難いことです。小使さんが熱心に勤めますけれど始めは躊躇しましたが、何しろ、風呂場の鍵を内から、がちやりと掛けてしまへば、何のこともないと判つてみれば、つひ、彼女も、汗つ掻きである爲めに、湯に入ること承諾したのでした。

こんな状態が當分、續いたのでした。このまゝ行けば何のこともないのですが、さて物事は

魔の多いものです。

或る夜のことです、すこし遅れて、彼女が湯に浸つて居ると、突然、その親切な小使さんが、狂暴な眼をして入つて來ました。

悪いことに彼女は、此の世に風呂場の鍵は一つのもので、恰も眞理のごとく信じ切つて居たことです。いゝえ、ちゃんと、別に、も一つ合鍵があつたのです。

それから、數刻の後に彼女の勿體ないパーズンが湯と共に流れ去つてしまつたことは何と云ふ情ない、思つても、はかない限りであつたでせう。

湯は、嘗て、源義朝を殺し、幡隨院長兵衛を亡くして居ます。

彼女達よ、ゆめ／＼湯の勧誘には、なまなかに應ずるものではない——と云ふ信號を私は掲げます、と同時に、ポケットマネーは、そば代を必ず用意すべしと警告したのであります。

### 虐待の手に危く女銀行員

これは、某銀行にあつた事實であります。勿論、彼女が出納係員として、客の應待から何から、笑顔と要領よさで、其の銀行の人氣を一身に集めて居たことは申すまでもありません。

「近田さんは、あれは支配人の思ひ者よ」

と迄、他の女銀行員に羨望される程な、上役の氣受けもよかつたのでした。が、此の噂が幸ひして、彼女には、誰れも云ひ寄るものもありません。中には、傳票の端に戀歌を書いて來るものがありましたも、わが近田さんは、

「あら、いやよ、こんな樂書、あたし歌なんか判りやしないわ」

と云つた程度に、軽く、ぼんと、はね返して、消しごむで、ごし／＼消して居る彼女でしたが、其の出納主任は、一體、何處の出納主任でも、さうである如くに若い癖に、頗る不愛嬌

極まる男でした。たとひ、近田さんの美貌にしてからが、彼氏を動搖させることの出来ない、石部金吉金兜と云つた風の人物でした。

それが、最も多忙な月末です。最後に残つたのが、この出納主任と近田さんでした。

出納主任は遅くなつてから、近田さんに萬事を依頼して夕食を取りに食堂へ行きました。そして、歸つて來てから、さて、今日の現金有高を、計算課から廻つて來た帳尻と合せました。すると、何としたことせう、近田さんの封印を押した札束が百圓足りません。結局帳尻と現金有高とは、つまり金壹百圓の不足であつた譯です。

さて、さうなると出納主任は青くなりました。近田さんも蒼くなりました。

再び傳票の最調査です。そして、十圓札、五圓札の調べ直しです。百圓札、一枚、何處かへ紛れ込んで居やすまいか——と、紙屑籠迄、引つくり返しての捜査です。

が、出て來ません。

出納主任は、當直の支配人代理の處へ其の報告に行きました。

支配人代理は、やつて來て、近田さんに云ひました。

「兎に角、出納係の責任ですから、取扱者たる貴嬢が辨償しなければならぬことになりま  
す、けれども、出納主任とも相談の上、何とか軽く済むやうには致しますが、かう云ふことは  
今迄に珍らしいことなのですから、もつとよく捜したり、調べたりして下さい」

これを聞いた近田さんは蒼くならざるを得ませんでした。

「百圓の辨償！」

當惑するのも無理はありません、一ヶ月の給料を棒に振つても、なか／＼に返済出來ない、  
重い負擔なのです。

「はッ」

と口の中で答へてゐる近田さんの眼には、女性らしい涙さえ、浮んで居たのであります。

それを出納主任が、凝つと睨めて居りました。

其の翌日、はつきり、百圓は出納係で辨償することに決定してしまつたのです。

さて、其の日、近田さんは、悄然として、何と家庭へ報告していか、それさへ緒が見付からずに、足音を忍んで銀行の通用門を出やうとしました。

その後を追つて、人事課のSと云ふ男がやつて来て、

「近田さん！一寸待つて下さい」  
と聲をかけました。

はつ、としてSの顔を見返した近田さんはぶる／＼震へ出しました。其の管です。辨償に續いて、人事課から呼ばれれば、もう、それは直感的に誠首を意味します。

「は」

と云ふのも口の中、近田さんは消えも入りたい風情でした。

その凄艶な姿を見て、人事課のSは、にやにや笑ひ乍ら、

「近田さん、何としてもお氣の毒ですね、お察しします」

と、先づ同情の言葉を浴びせて置いて、

「ありがとうございます」

との彼女の哀れな聲を聞いてから、

「何だか、それについて、出納主任が貴女に折入つて話があると云つて、僕の家へ今夜來ることになつて居ます。だからして、何かのいゝ方法が見分かるかも知れません。どうです、どんな話ですか、一寸いらしてみませんか？」

と云ふのです、近田さんを取つては誠に渡りに舟の話ではありません、

「はい、是非、お供いたします」

と近田さんは、吻と救はれたやうな氣になつて、人事課のSに従つて行つたのでした。

間もなく、Sの家へ出納主任は来ました。相變らず、苦虫を嚙み潰したやうな面持ちで、すつ、とこの二階へ上つてしまひました。

間もなく、Sが階下へ来て、近田さんの前に、どつか、と坐つた時には、近田さんの胸は、どき／＼したのであります。

「どんなことを仰しやつてますかしら？」

Sは、悠々煙草をくすらすして、にたり、近田さんの美しい顔を見て笑ひました。

「近田さん、あなたは幸福ですよ」

「何故ですか？」

近田さんは不審な面持で訊ねました。

「大層、同情されて居ます」

「誰方が？」

「出納主任がです」

「はあ」

Sは其處で膝を進めて、

「出納主任は、貴女の責任を背負ふと云つてます」

「まあ！」

驚喜した近田さんは、

「でも、それでは、あんまり濟みませんわ」

と淋し氣に云ひました。

「いゝえ、實はね、近田さん」

と云つて、人事課のSの熱心に語り出した處に依ると、出納主任は、いゝ妻を娶らうとして幾年も苦心をして居るとのことでした。

「あゝした銀行一の信用ある人ですし、いゝでせう、近田さん、出納主任は、かねがね貴女だつたら妻に欲しいと云つてゐるのです、そして、あなたが妻になつてくれるのだつたら、勿論あなたの今度の過失も全部負擔するしそれに敵首の心配はなし、いゝや早速、銀行を退かせて堂々と式を擧げると云つてます。如何です、近田さん、いゝ縁ぢやありませんか」

「まあ！」

あの出納主任が――、さう思ふと近田さんは、又しても呆然としてしまひました。

が、勇氣を出して、

「で、あたしが承諾しませんでしたら？」

「そりやね」

と、急に容を正してSは云ひ切りました。

「人事課の私として、他に噂も聞いて居ますし、此際覺悟を願はねばなりません！」

近田さんは、此の時、何とも答へずに、Sの顔を見ました。

「兎に角、一寸、二階へ上つて下さい」

と、Sが頻りに云ふので、近田さんは、Sに引きずり上げられるやうに二階へ上ると。

襖の前で、

「此處です！」

と云つて、Sは慌てゝ、階段を降ります。怪しい！と思つて近田さんが、つと、襖を開けると、どうでせう、其處には出納主任がとろん、とした眼で酒を飲んで居ました。

「おつ！来たね」

さう云つた出納主任は如何にも嬉しさうでした。近田さんは、つか／＼と進んで、ふと開け放された次の間を見ますと、何と、其處には、明らかに寢具の用意がしてあるではありませんか。



電光石火の如く近田さんの頭腦に閃いたものがあります。

「あなたは、まあー あたし、永遠に失禮します！」

近田さんは、はつきり蔑視の眼をくれて、さつさと、階段を下りて、Sには挨拶もせず戸外へ出ました。

それから、女給生活に入つた近田さんは、

「でも、この方が、さばくしてよくつてよね。おかしな手もあるのね。出納主任、わざと百圓札一枚藏して置いたのよ。男つて甘やかしてくれるのばかりが手と思ふと違つてよ虐待して虐待して、それから意外な好遇をして、その急激な變化に、あつと思つて氣を許し感謝した、その瞬間に、あらその瞬間よ、ですね、おほー」

と、語つて居る。

### 名士の名前を並べて

間違ひも間違ひ、大審院の判事成道齊次郎氏を色仕掛けの指輪詐欺犯人だと濡衣を着せて、飛んだ新聞種を拵えてしまつた麻布六本木の長唄師匠中Xせい(五六)さん、間もなく眞犯人が蒲田で捕まつて、平身低頭、深謝に罷り出たが、さて、それ程、他人の空似で騒がせた當の犯人前科二犯の〇〇根三次(六〇)が、どうして、さう易々と、女世帯を張つて居るやうな、しつかりものの女性を僞くことが出来たのであらうか。

先づ、彼の術には、貸間札のある女主人の家を見付けると、

「私は大學(或は高等學校専門學校)の教授をしていますが、昨年、妻に死別したので後添の見分かる迄間借りしたいと思ひます」

と云ふ工合に話しかけ、さて、老人になると、どう云ふ風な經濟を取らねばならぬとか何と

かかとか、如何にも質實なやうな人間に見せかけ、女師匠の家などでは、「私に一人娘があります、師匠の評判のよいのを聞いて、どうしても弟子入りがしたいと申しますので、お願ひに上りましたが」

とか、佛壇でも見付けると、

「まことに殊勝なお心掛けです、私も妻も無くし、娘も無くして居りますので、一寸御回向させて頂きます」

とか云つて、佛壇の前に坐つて、お経まで讀んで、

「では、二三日のうちに又参上しますから」

と云つて、至極、穩やかに引取るのです。その約束の日には行つて、

「今日、引つ越さうと思ひましたが、突然田舎の老婆が死にましたので歸郷しなければなりません、けれども、どうも三百圓も月給を取つて居ましても、月給日にまだ四五日も間があるも

のですから——」

と、すぐ返済の信用あるやうに見せかけては旅費を詐取したり、女師匠の家では、

「娘が折角、お宅で長唄を習ひたいと申して居ましたが、肺炎になつて死んでしまひましたので、せめて記念に娘の持つて居た金指輪を差上げたいと思ひますけれど、寸法が判らないから貴女に、はまるやうにして持つて来るから、其のはめていらつしやる、ブラチナの指輪を一寸貸してくれ」

と、かう云ふ筆法で、指輪を詐取して歩いて居たものです。

勿論、かう云ふ男は名士の名前を矢鱈に並べ立てたりするものです、それで流石の、しつかり者の女世帯を張つてゐる相當な年輩の女性が、簡単な魔手に掛つて了ふのです。

戒心に戒心を要するのは何かしら名家の名を持ち出して、信用を裏づけやうとする男です。人の信用は何處迄も人そのものにあることに、よほどの注意を要します。教授だつたら學校へ

電話を掛ければいゝし、指輪の寸法だつたらコヨリでも計れるではありませんか。女性が男性と何かの關係を持たうとする時、輕舉はもつての外のひがごとです。

## 恩師への悲戀と少女

### 神の如き戀心

臺灣芝山巖頭の月は清い。臺灣切つての景勝地であるばかりでなく、教育の聖地として有名である。

思ひ出せば去る明治二十八年の七月、臺灣總督府學務官揖取道明氏以下六人が、領臺以來初めて臺灣人に我が國語教育を施した記念の土地であり更に其の翌年、二十九年一月のしかも元旦に急に土匪の襲撃を受けて悲しいかな、悉く兇刃に斃れたと云ふ土地である。

今、その記念碑の邊りを、うな垂れ乍らに涙を噉り上げ噉り上げて逍遙して居る若き美しき女性がある。

「おゝ！ XX先生」

天を仰いで曇つた瞳に、幻を追ふ可憐さよ、やがて、彼女は思ひ諦めたやうに涙を納め、何かしら瞑想し、祈願して、ピストルを取り出した。

轟然一發、教育の聖地に時ならぬ銃聲は漏れた。

が、次の瞬間、彼女は、呀つ、と云ふ間に巖頭より足を踏みこらせて、二丈の崖から墜落したのである。

重傷を負ひ、失神した若き女性は、忽ち附近の人に擔がれて、臺北病除の外科病室へと運ばれた。

病名は頸部盲管銃創兼頸椎骨折で、後腦の運動中樞神經を冒されたので全身不隨、ギブスベツドに入つて、全治迄に三ヶ年を要すると云ふ。

處もあらうに、教育の聖地で、しかも女學生らしさの失はれない純真な女性が、何が故に世

を果敢なみ、ピストル自殺を遂げやうとしたのであらうか、おゝ！ 教へ子の純真なる恩師への思慕！ それが募りつゝの結果、恩師を信仰の對象にまでし、更に運命的に悲戀へと辿らせたのである。何と云ふ可憐な情熱か、何と云ふ純真な殉愛であらうか――。

彼女は本年二十歳、臺灣高雄高等女學校を卒業したX崎〇る子、臺北市中の文化村大正街に住む佳人であつた。

〇る子は、始め臺北第二高女に在學して、教頭XX教諭に教へを受け、殊に其の文才を認められて居たが、昭和四年、それから彼女は高雄高等女學校に轉校した。しかし、轉校した後もXX教諭には文章の添削を通信で受けて居た。

世に教へ子が教への君を慕ふ程、純真なものがあらうか、それも感受性の鋭い、頭腦明晰な女性が、自分の才能を認めてくれた先生を慕ふ心持ちは美しいものである。しかし、かう云ふ場合に心すべきは其の教へ子の純真な思慕を、どう指導してゆくか、である。

××教諭を慕つた○る子の心は、離れ住むに到つて益々熾烈を加へたのだ、そして、三年を経過し、偶々東京へ来るに及んで、それは、もう已み難い戀と姿を變へて居たのである。

××教諭は久しぶりの教へ子の手紙を懐しく讀んで、はつ、と心を打たれた。それは盛られた内容が、あまりにも深味をおびて居たからである。今、その全文を掲げると、

×

×

×

××先生その後絶えて御無沙汰申し上げ御ゆるし下さいませ、先生に御逢ひ致したいと思ふ心のやりばに窮し只今は東京へ来て無味な生活をしてゐます、約一ヶ月の滞在ですがこれだけでも多少助かります、海の無い港のやうにタクシーが流れ、それを追ふやうに人の波がつゞきます。その中に○る子は毎晩叔父につれられて銀ブラを致してをります。つまらない奴と御叱り下さいますな、とてもとてもたまらないものですから、臺北へ来てからも御手紙を差し上げるのもへんに思へるし、御訪ねしますのも氣がひけてとても情ない日を送つてゐました、先生

に御目にかかりましたも云ふ事もさらになく、自分がいやになるほどでございます、先生を忘れられないことを悲しみます。これも前世の約束ごとでございます、一分間でもいいと思ひます、先生に御目にかかりたく離るれば餘許に戀しくなつてしまひます、こんなことを書きます○る子は何といふ大膽な女になつたのかとあきれざるを得ません、先生にはさぞかし御迷惑と思ひますけれどたまりませんままに筆を走らせました、御ゆるし下さいませ、何年経過してもこの心を壓へる何ものも無いと存じ悲しくなります、でも先生に御迷惑をかけないやうに注意いたします、電車の中の人々がどれもこれもみな先生の御顔に見えるのです。私はこの幻をやぶりたくはございません、或は喜び、或は悲しんでこの幻像に心をうばはれてゐます。とても／＼自分の心を偽ることが出来ないためこんなに苦しむのであらうと存じます、死にたいほど悲しくなります、この天地が裂けて先生もこの世界のだれもかも落ちこんでしまへばよいと思ひます、何といふことでせう、ではもう失禮いたします、御腹だち下さいませんやうにく

れくも御願ひいたします。

何と云ふ親愛な手紙であらう、何と云ふ卒直な感情の流露であらう、「〇る子は何と云ふ大膽な女になつたのかと呆れざるを得ません」と云ひ「とても堪らないのですから」と云ひ「お訪ねしますも気がひけて」と云ふ彼女の心境が、どんなに苦しく、又、どんなに乙女心の謙讓さを持つて居たかもよく判る。と同時に、三ヶ年も消息を絶つて居てさへ、これだけの事の云へる彼女と××教諭とが、一片、たゞ懐しきだけの師弟であつたかを考へ直してみなければならぬと思はれる。

さて、此の至純な女性の思慕、否、堪へ切れぬ戀慕の手紙を受けて、××教諭は何と返事をしたであらうか、先づ、それを掲げる。

×

×

×

拜啓過日來御上京なされてをられました由さだめし草々御快適の事が多かつた事と存じ上げ

ます、御滞京中御たよりをいただきうれしく存じました、昨日は御歸北の御知らせをいただきました、御手紙に接する毎にいつに變らぬ御純情感鳴の他ありません。いろいろと御珍らしい御話も多い事と存じます、一度閑暇を得てゆるゆる拜眉御物語を承はりたいと存じてゐます、御遊びに御出で下さい、あなたの母校ですもの。御遠慮なく何時でも御出かけ下さい、又遠いけれども近來は市バスも通する様になりましたから宅の方へ御出かけ下されてもよろしくでございます。

霧雨もかかる道なり嵐のかよう道なり

ほそぼそと通ふ道なりさび〜といそぐ道なり

〇る子さま、これは白秋さんの「から松の林を過ぎん」と詠める中の句です  
ねから松の林の奥もわが通ふ道はあり

とも云つてゐました

から松の林の道は吾のみか人も通ひぬ

とも云つてゐます

から松は淋しかりけり故知らず楽しみひそめつ

ともよんでゐます

世の中はあわれなりけり常なれどうれしかりけり

とも唄つてゐます、○る子さま、之が人生の姿でせう。あなたに切な悩みがおありの事は私にもよくわかります、それを私はひそかにむせび且つ、むせるのさへ感じます、私のほんとうの心を申し上げればあなたと云ふものは可哀想でならないのです、あはれに堪へられないのです——すみませんね失禮な事を申して——それは美しく燃える一つの信仰の外は何ものでもありません私は尊いと思ひます、然し信仰は悲しきものよ、それは信仰の水でなければ中和の道が求められませんもの、それが哀れでなりません。

から松の林を過ぎてから林に入りぬ

です、人生情熱の行遍路お互の行手には果て知らぬ細いさびさびとした道が林から林へと續いてゐます。久遠のみ恵光はいつから私達を照らす約束がしてあるのでせう。私はあなたの聖像のやうな幻を抱いて憂悶して來た事を白状しなければなりません、然しあなたを不幸にしてはならないと云ふ事は私の純情です、あなたの魂がみ佛の慈光によつて護られ永劫に恵まれてあります様にとの切ない祈りが私の朝と夕です、それは正しい、それは美しい、それは尊いとあなたからも御佛からさへも讃めていただけなくてはならないと信じてゐます。

人の世の祈りはあはれなるもの切なれどうれしかりけりと歌はれないでせうか

とにかく學校へ御訪ね下さい。ゆつくりと在京の御話でもお伺ひませう。

十八日午後

○る子さま

これは又、優しい書翰である。如何にも愛弟子を憶ふ情が溢れて居る、しかし、彼女をしてビストル自殺へ導く、そもくの原因は此の手紙の中には無いであらうか？

前半の平靜さが偶々白秋氏の詩を引用する邊りから、遂には「私はあなたの聖像のやうな幻を抱いて憂悶して來た事を白状しなければなりません」とあることは、何かしら返事の中かから情熱を汲み取らうとして喘いで居る苦戀の若き女性の尖鋭な感受性に、どんなに強い反響を與へたかを察しなければならぬ気がする。

果たせる哉、彼女の戀愛は此の書翰に依つて、第二段階へ進んでしまつたではないか、それは直ちに返書を認め、○る子の手紙で判る。

X

X

X

御手紙まことに嬉しく拜見いたしました、御手紙によりまして先生の御心を始めて存じ上げ

ました。でも若かして○る子からの御手紙に御困惑遊ばして心もなき御事を御書きなされたのではございませんか、何故なれば○る子は非常に用心して認めましたのですけれどそれ程激しい言葉を用ゐましたか知れませんか。

信仰によつて佛陀のみ惠光によつて堪へられざるものを堪へやうとしたとしても神さまは○る子を偉いとおほめになるのでせうか？もしさうであつたとしてもほめられたとて何になりませう、○る子はいやです、きき分けな子と御叱り下さいますな

鋭い洞察力を持った先生の瞳こそ私の生命を断ち切らせ、興奮させる不思議なものでございます、ほんたうに腹立たしいほどの強い力で以て○る子一人は働きかけるのですもの、随分永い間、先生の瞳をおそれて過ごしました、○る子の心の中のどんな些細な事までも既に御見透しなさる様なあの強い御目の光、迫る様な光——それこそたまらなく魅惑的で恐ろしいものでございました。



心の奥深く秘めた想ひを先生に見破られる事を○る子はどんなに恐れてゐた事でせう、なぜなれば憎まれたり、嫌はれたり、輕蔑されたりする事は死ぬよりも辛く思はれましたから、たとへ好感はいだかれなくとも嫌悪だけはされたくございませんでした。

だから○る子はいつも細心の注意を拂つて先生に御目にかかる時や又は家にゐる時など努めてそれらの素振りを押しかくしてをりました、だけれどどうする事も出来ない力を持つた心中に燃ゆる火は瞬でお會ひした時やバザーでお目にかつた時全く自分乍ら途方にくれるほどの強い力で以てあらはれ私を悲しませました、あのとき以來私はつきりと自分を見直し自覚する事が出来ました、それによつて知る自分の貧しさ、あまりにそれはかけ離れ過ぎてゐて泣く事も出来ない様でした

高雄にゐた時片思ひの佗しさに堪へかね尼になつてしまはうかと考へてゐました、それに父は人一ばいに私を理解してくれてゐましたし譯を話せばなれない事もありますでしたし、わ

たしも口ぐせの様に尼になりたいと申してゐました。

高雄の郊外に尼寺がございました一日そこへ家族と見に行きましたとき私は良く觀察して歸つたのでした、でもそこは男斗りで出来た尼寺でございましたからこれでは先生の事ばかり戀わづらつて却つて苦しみを増すばかりである事に氣付いてやめにしました

一人床に入つて色々胸に湧き起る惱みに堪へかねては夜毎々々を泣きぬれて過ごさねばならぬ者の悲しさ、これこそ○る子の全靈を流れ流れてくる感情の泉に外なりません、わたくしの先生にお目にかかつて御祈りしていただくかと存じます、忘れる事が出来る様にとそして誰よりも良い子になりますわ、素直な優しい子に、私の神さまは先生ですもの、先生でしたら私はどんな人間でも御變へする事が出来ますもの

○る子の生命の盡きる日迄共にこの世にあつて頂きたうございます。先生の無い後の世よ、何の魅力をも感ずる事が出来ないものでせう、先生の命の盡きる時、それは○る子の命のつきる

ときでございます、それ迄先生が御幸福でしたら○る子も幸ひでなければなりません、○る子は先生を離れて何も考へる事が出来ません、休み中に先生が御迷惑でございますなら御會ひいたしたうございます、何時ごろでせうか？ 十七日の座談會へは必ず出席いたしたいと考へてゐます、丁度その日、臺南から來客がある事になつてゐましたが都合して参ります。詳細に御教へ願へますれば嬉しう存じますけれど、今のところ親しい友は皆行きさうにございません故私一人で行かねばなりません、勇氣を出して参ります。先生が必ず出席して下さると信じて暑さがきびしいせいか、ひどく弱つて行く様に思はれます、それに精神的にもいぢめられますものですから、すべて自業自得と思はれますどうぞ先生も御身體を御大切に遊ばして下さいませ、こんな御手紙をまだ他に書く女性もありません様に思はれて妬けてしまひますの、では失禮します

六月二十五日

○る子拜

いとしいXX先生に

どうである、はつきり「御手紙によりまして先生の御心を始めて存じ上げました」と云ひ、更に「こんな御手紙をまだ他に書く女性もありませんやうに思はれて妬けてしまひますの」と述べて居るではないか。

しかも、これより甚だしいのはXX教諭が○る子の此の手紙に依つて感受した心持ちであるその激動のさまが、次の手紙にまささま現はれて居る。

X X X

お手紙ありがとう

夏の夕の静な窓べに物思ひ深くよります、君を偲ぶ事は私の堪へられさうもない憂悲であり苦惱であります、悲戀と申すか哀憐と申すか、その切ない熱いといきに息づまるのさへ覺えるのです、念じて下さい、神を、み佛を、渴戀慕の眞如の月影に輝く佛陀のみ惠光でなければ、今の

恩師への悲戀と少女

あなたは燃え盡してしまふかも知れないであらう事を怖れます、堪へて下さらねばなりません  
 ほととぎすなくやさ月の花あやめあやめも知らぬ戀をするかな

古今集の歌人もかく惱むのでした

正直に私は申します、これまで何年かあなたをおそれ参りました、何を怖れる？ わかり  
 ませんでした高雄から御出北なさつた事がありましたね、あの時でしたか、驛でお目にかかつ  
 た折のあなたのひとみに私の心は射しすくめられるのを覚えました、私は思ふ事が出来ます、  
 最近バザーの時一寸御目にかかる事が出来ましたね、あなたのお目々が私の心臓に喰ひ入るの  
 を感じます。

私はあなたの東京からのお手紙であつた様な感じでもするのでしたと同時に、思慮の外と云  
 つた風な激情にも打たれたのでした。

おそれゐた日がやつて来てしまひましたとも、とうとう來るべき所に來たとも、大へんな  
 ところ迄來てしまつたとも、要するに名狀を缺いた嵐に見舞はれた情緒でした、なぜにあなた  
 の御目をあんなに怖れてをつたのか、なぜにあなたに對する感情があのように堅ばつてゐるのを  
 覺えつづけたか……これで私ははつきりとそれを清算する事が出来るのでした。

しかし、その計算に誤謬がないのなら私自身にとつてそれは大へんみじめでなければならな  
 くなつたのでした。あなたの純真から湧く泉は眺めながめる時、泣いても泣き盡されない私を  
 發見しなければなりません。悲しい諦めが約束されてゐる水に向つて火が燃えあつてゐ  
 るとしたらお互ひの爲にそれは此上ない痛ましい運命でせう、宿業の猛火はただお互を孤別に  
 焼くだけですから、勿論その火は呪はれてはなりません、前世の戒業が省みられ、恥られ、誠  
 められ各々から久遠への祝福に祈られねばならないと存じます、悪業の海に現果のあらし荒ば  
 んする夕べ、私共は久遠のみ光を見失つてはなりません、あらゆる怒濤と呪咀とは佛のみ名に  
 よつて明化淨化せられねばなりません。

とは云へそれは實に苦しい事です。か弱い人の子にそれは餘りにも又あまりにも重過ぎる負荷に相違ありません。唯！堪へさせたまへ支への、み手をかしたまへと祈らざるを得ません。實のところ私はほんとうに苦しみました。悩みました。死と云ふ場面さへいく度幻にゑがいた事でせう、それは又何と云ふよろしいそして楽しい解決であるでせう、併し二つの魂にだけ樂みな解決がいつ迄も二つの魂を祝福に導く目當に人の世の子は苦しませられ、悩まされるのです。運命の悲しみを呪ふ魂が果して久遠に幸ひするでせうか、その解決が暗黒であるなら、ああ！

私たちはお互に光を見失つてはなりません、○る子さま、私の物狂ほしい云ひ方をお赦し下さい、私は今も悩みにみたされてをります、○る子さま、私はあなたの愛をおうけする事が出来ないものです、堪へて下さい。御祈りします、悲しい事ですが……それが運命で……

しかし私はもうあなたのお目を怖れないでせう、あなたに對して心の堅ばりを感じないですむのでせう……ごくオープンなフリーな気分でお會ひ出来る事と思ひます。いつ迄もお會ひして行けると思ひます。この世も次の世もその次の次の又その次の世迄も實はお會ひいたしたい心はやけつく様です、いやな事は少しもないでせう。落ついてゐてよろしいですよ。

○る子さま

教育者としての立場と、人間としての立場とが、××教諭の心の中に相闘つて居るさまが、すつかり意識されるではないか、年輩者、妻も、十七になる子もあると云ふ××教諭のもう既に世慣れた心さえ、彼女の情熱は、かくも××教諭に正直に物語らせて居るのである。しかし此の氣持が情熱の彼女を、至純な故の教への君への愛着を救ひ得たであらうか、又は逆に、かう云はなければならぬ氣持が、彼女の運命的な戀愛へ油を注ぎはしなかつたであらうか。それからの、××教諭と×崎○る子とは、どうなつたであらう。迷ひのまゝに、×崎○る子と頻りに會ふのを重ねるやうになつた。

彼女を、悲しい苦戀から救ひ上げやうと心に説き聞かす一面に、X教諭も亦男性である。殊更に情趣の深きを掬する文學的立場の禮讀者である、至純を愛する素質を併せ持つて居る、心の奥のその奥に、彼女を救はうとしつゝ「會ひたい」「見たい」と云ふ心は果して働かなかつた、と云ひ得るであらうか。

○る子、X教諭は、遂に連日、草山や北投温泉や、水源地や、士林へと相携へて出掛けるやうになつてしまつたのである。

そして負傷した、○る子の涙乍らの物語りには、最初に會つた時はX教諭は、

「僕は貴女の愛は受けられない」

と云つたのだが、第二回の時には、X教諭の方から積極的に接吻抱擁をしたと云ふのである。それから、○る子は全く全身全靈をあげて、夫人や子供のある事も承知の上で愛し出したと云ふのである。

處が、○る子とX教諭との、かうした妙な形のランデヴウが遂にX夫人の悟る處となつたので、

「貴女とは別れませう、お互ひの爲めになりません、會はずに居れば自然に忘れる時が來ます」と宣言したのであつた。

その言葉が、○る子に、どんなに悲しく響いたか、○る子は、男女が接吻したり、たゞ抱擁したりするだけで、妊娠するものと思つて居た程の純真無垢な若い女性である、遂にその言葉を捨てられたものと悟るに到つた。

それで、○る子は死を決してX教諭に

「一緒に死んで！」

と頼んだのだけれど、X教諭は言を左右にして承諾しない。

その腹立たしさ、と口惜しさ、と堪らない寂寥が、七月二十七日の朝、大正町の自宅附近の

藥屋でカルモチンを買はせ、午前十時五十九分の汽車で士林へと赴かせ芝山巖頭にと立たせたのである、士林から彼女は、

「先生は冷酷であります、○る子は覺悟しました、之を遺書にします」

と××教諭へ發信したのである。そして、○る子は、ピストル自殺を計り、果ては斷崖より墜落して身動きもならぬ重傷を負つてしまつたのである。

肉體的の關係がなかつたことは、○る子も××教諭も言明して居る。そして、此の報が傳はると、××教諭は自發的に辭表を提出して、八月三十一日附で、依願免官となつた。

××教諭は辭職の後に身に一點の汚れないことを斷言し、○る子を救はうとして失敗したと述懐して居る、そして、○る子も決して恨まぬ、と云つて居る。

しかし、×崎家では、

「卑しくも教頭ともあらうものが、他人の娘と戀愛遊びは怪しからぬ、何故、恩師として、こん

な場合に早く親に知らせてはくれなかつたか」と憤慨して居るのである。

一時、この問題は臺灣の教育界に一つの旋風を起した。

さり乍ら、この問題は大きな全國的問題ではなからうか、そして、生ぬるい不徹底さが何處かにあつて、それが、かうした問題を惹起したのではないか、と考へさせられる。

現代の教育の一面が、その缺陷が、ほのかに其の姿を見せては居ないであらうか。

それにしても、奇しい戀愛であり情熱でもあつた。人間としても××教諭の心にも私は同感されるし、×崎家の申分も至極尤もだと考へられる。

たゞし、あゝ！ 悲しきは教へ子の戀愛であることが、今更に、さう云ふ場合が、まゝあることの想像されるだけに、胸を衝くではないか、神の如き乙女の燃ゆる情と共に！

## 處女の自殺種々相

(1)

富士山の姿が一番美しく見られるのは、大島である。

椿の花が咲き、ロベの鈴が鳴り、牛乳の甘い、あの明るい大島。その三原山が、近頃は、まるで火葬場を引き受けた形だ。

しかも、このトツブが、都の處女によつて切られたのだ。極めてロマンチックに——。

だが、私には、あの大島と自殺とを結び付ける時に、あまりにも、そぐはない氣持を、どうともすることが出来ない。

大島には死の影は無い筈である。島のアンコは黒髪美しく、眼鼻立も、はつきりして居て、ど

こかに 源 爲朝の末裔といつた強さと、大官らしい呑氣ささへ持ち合せて居る。

言葉も雅びた、そのまゝで、しかも島の生活はこの上もなく平和だ。

大島の本當の生活には、新舊思想の衝突などは薬にしたくもない。島では、息子に嫁を迎へると、その父母は直ちに家を明け渡して、自分達は別居し、そして、御神火の煙が年中絶えぬと同じやうに、老齡になつても、終生働くことを唯一の楽しみとして生きて居る。だからして島の男女に不平のありやう筈はない。神經衰弱になつたら大島に行くに限る。厭世觀を抱いたなら大島へ行つて人生の明るさ、生きる愉快さを味得すべきだ、と私は從來思ひ切つて居た。それが、自殺者の續發だ。情ない限りである。

御神火は島人にとつては神聖そのもの、胸に煙が絶えやせぬ——とは乙女の情熱を象徴した以外の何でもない。

若し、大島に暗さがあるとすれば、それは強烈な明るさの影だ。かつての流人の生活だけだ。

特にいつておきたいのは、大島への遊覽者の接する宿引にしても旅館にしても料理屋にしても、酒間を斡旋する女にしても、ほとんど内地から流れて行つた者達だ。だから島の生活に觸れるのには遊覽では駄目だ。島人は島人としての安心した生活を、しつかりして居て、けんらんな都の紳士淑女に羨望の眼など、いさゝかでも呉れようとはせぬ。従つて昔の流人も流人は流人の生活であり、島人の生活と遠く隔つた處に暗さがある。爲朝は島の王者になつたからいゝ。だが不受の墓、四十七士の遺兒の墓は、だから、ものゝ憐れを感じさせる。これも昔の話。しばらく、今日の大島に歩を止めたもの、實際の島の生活に觸れたものには、死の讚美など阿呆くさくて出来るものではない。

そして、松本貴代子さんなどが飛び込んだのは朝であつた。さうだ、三原山の自殺者はほとんどが午前中だ。夕風立つて三原山の砂漠に記された一道の白き足跡が、ほのかに消されて行く頃は、山はうなり、御神火は燃えて夕雲に映え凄氣こそ加はつて、むしろ、人の棲む所へ一

氣に駆け下りたい衝動を感じる。

三原山の死は決してロマンチックなものではない。死の現實を直視して見るといゝ。身は逆落し、一瞬にして焦熱地獄だ。人の死を山は怒る。

童話情調の大島に死を求むるは愚の骨頂だ。よろしく聰明に、島の人生の平和を満喫すべきだ。

(2)

三原山で死んだ處女は、美しくしき姉の死から『若く美しくしき間の死』を願つて居たやうだ。しかし、これは大きな間違ひだ。

人の死の美しくしさは、大樹の枯れるやうに、老齡になつて、自然に枯れ去つた姿が最も美しいのだ。若人の死には美はない。そこには、あまりに、みじめな、痛ましきがあるのみだ。



誰か、バラの花の美が月夜の枯ススキの美にまさるといひきれやう。人は自然に若さから中年へ、それから老年へ、と移つて行く處に美がある。平和な翁媪の姿を見るがいゝ。一點曇りない美しさがそこに嚴存する。

あの自殺の後に、諫死悲劇の櫻内本子さんの自殺があつた。時も時、ドイツ映畫の『制服の處女』は我邦で封切られて活動會社の宣傳が巧みにこれを利用した。

あの『制服の處女』の心理がわからないといつた文藝家があつたさうだ。その愚やわらふべしだ。

兄弟ばかりで、やさしさの少ない家庭に育つた私は、はづかしながら、この年配になつても、同性に、制服の處女のやうな氣持を感ずることが随分ある。

それは情熱と煩悶と失望とで解決される異性への愛とは違つた、何ともいへぬ清淨な親しさの氣持だ。

制服の處女に現れる恩師への思慕、それは同性間であつた。が、昨年の夏、臺灣の教育界に一大旋風を捲き起した恩師への思慕からの處女の自殺事件は、恩師が男性であつた。

彼女は臺北の第二高等女學校に在學し、それから高雄の高女に轉校してそこを卒業した二十歳の麗人だつたが、臺北第二高女にある時、教諭に文才を認められ、それから常に文章や和歌の添削を受けて居た。そして彼女は高雄に轉じても常に文書の上で教へを乞ひ、つひに強烈な思慕の情を抱くに至つた。

彼女から『先生を忘れられない事を死にたい程悲しくなります』とか『とても、とても堪まらないものですから——』などいふ切々の書状を受けたその教諭は、初めは白秋氏の詩を引用したり、この氣持を宗教に入つて解消してくれ、と訓へたが、つひには『私は貴女の望像のやうなまぼろしを抱いて憂悶して來た事を白状しなければなりません』と書き送つた。

教諭は人間として、恩師の立場としてとの間に煩悶し続けながら彼女と、しばし會つた

が、第二回にはつひに彼女の情熱に負けて、接吻抱擁をしたといふが、忽ち愕然と覺めて、お互の爲めに別れることを宣告した。この宣告は、教へ子の誰しも慕ふ教諭を獨占し得た彼女のプライドを根底から覆へした。丁度制服の處女が監禁され、恩師と逢ふことも語ることも禁ぜられたその宣告と同じであつた。

彼女は絶望した。そして『先生は冷酷であります、××子は覺悟しました、これを遺書にします』と發信して、臺灣教育の聖地芝山巖頭で、ピストル自殺を圖り、二丈の絶崖から落ちて幸ひ生命は取り止めたが、全身不随、全治三ヶ年の重傷を負ふた。

教諭は職を辭して謹慎した。

恩師とその子弟の思慕の問題は、處女の死を誘引しやすい。

(3)

同性愛の問題も處女の身には痛ましい。

十八になる處女が電話交換局に入つた處、そこに、年上の男のやうな同僚が居た。彼女はやさしい性質であればあるだけ、この男のやうに振舞ふ彼女を好んだ。

つひには、彼女へ、

『おい！ 君』

と呼びかける男のやうな同僚に、

『あなた！』

と優しく夫に仕へるやうに答へる彼女になつた。

處が男のやうな同僚が遠くへ轉任した。すると優しい十八の彼女へ毎日思慕の手紙を寄せ、同性愛の誓ひを強要して已まなかつた。

『君、僕は達者で事務員生活をしてゐる、薄給で君を喜ばすことは出来ぬが、しかし今に社長

にでもなつたら、屹度君を幸福にしてあげる、だから君と僕との仲は——」

といふ調子の手紙で。しかも男のやうなその女性はずく離れたため、不安と嫉妬の感情が昂じて、つひには戀文といふよりむしろ脅迫文にひとしいものを送つて来るやうになつた。

「貴郎の氣持は、よくわかつて居りますが、何ぼ愛し合つて見た處で二人は一緒にされる譯でもなし、その邊の所をよくお考へになつて、女らしい道を進んでは頂けませんか」

やさしい彼女は、かういふ手紙を送り、思へば友愛以上のあるべからざる、擬態戀愛を今では恨めしく思ひ、脅迫文に堪へかねて飄然と家出をしてしまつた。死を念じて——。

死を求める處女の心の色調は、昔と全く變つてしまつた。

夜叉姫が、父義朝殺されて後、兄頼朝の捕らはれたのを見て、女として尋ね出され恥を見るより、むしろ死んで父の傍に行かう、と入水自殺したのや、伊豫大洲の井口松江が、十八の美くしい身を父の劍道の門弟岩藏に横戀慕され刀でおびやかされて、反つて岩藏を斬り、死につ

いたのや、筑前の正女が貧しい許嫁に節を守つて、富豪に嫁ぐのを強要され自刃したのや、遠く袴袴娘が讒臣阿部臣國見の訴へに處女を疑はれたのを悲しみ給ひて、五十鈴川のほとりに縊れ死し給ひしこと等を思ひあはせると、かつての處女は、その死を選ぶに當つて、やまれぬ痛ましい理由を、はつきりと持つて居た。そして死を悲しみつゝも死んで行つたさまが、私には美しく感じられる。

近頃の處女の死に、どういふものか、死に對する憧れを持つて居ることを悲しみたい。それは、人生の眞實に觸れず、生活の實相にも觸れずして、暗中摸索した、ひとり相撲の結果が、人生らしいものを、生活らしいものを、経験のない心で、勝手にこしらへあげて、その影像に怯えるものと私はいひたい。

尠くとも、それは卑怯であり我執であり、同時に決して美しくいとはいはれない。

華嚴の瀧へ日の丸の扇を、さつと開いて飛び込んだ男の實際は、日の丸の扇の流れ行くさま

こそ美しくしけれ、大自然に踏み潰された生命は決して美とはいひ得ないやうに。死は弄ぶものではあり得ない。最後のもの、絶對的なものであることはいふも愚かな話である。

諫死も餘りに時代錯誤である。人生は廣い、且深い。

世の處女達よ、御身の美しい心を、小さな觀點に、こびりつかせないやうに――。

## 心中生残りの女は語る

### 決意の瞬間

その男と、あたしとが、戀仲となりましたのは、昨年十一月頃でした。お店（喫茶店）へよく来て、つい、あたしの心が動いたのです。勿論妻子があるなどは、ちつとも知りませんでした。それが判つたのは、すつと、後のことです。

――が、いよく男には妻子があり、あたしは東京に身寄りもなく、複雑な父の關係を持つて、居りまするし、添ひ遂げることが出来ない、いゝえ、もう、そろそろ會ふことさへ自由がきかなくなりました此の四月頃、始めて男から死んでくれぬか、との誘ひを受けました。けれども、あたしは、死ぬる氣には、なかくなれませんでした。

それは六月の二十四日のことです。丁度、あたしの公休日なので、男と一緒に江の島の方へ遊びに行きました。處が、男は、江の島の一つ手前の停留所で降車してしまつたのです。今にして思ひますと、あの時、男は死ぬ気で居たと考へます。けれども、あたしにはそんな突きつめた考へは、まだありませんでした。

それで何気なく、海邊の方へ出て行つたのです。

もう、すっかり暮れてしまつた、その上に月の光りの極く淡い、如何にも梅雨時の、ほんの霽れ間のやうな、うすよどんだ晩でした。

見ると、波打際に、それこそ着物の濡れるのも、お構ひなしに、坐り込んで居る男女がありました。で、あたしは、

「あんなの、死ぬ人でせうか」

と男に、尠し恐怖を帯びた聲で申しました。すると、男はあたしを、きつと睨めたやうに感

じました。

あの鎌倉の海岸は非常に淋しいく處です。矢つ張り、自殺者が多いと見えまして警戒の人が澤山出てゐるらしいのです。

びかり、びかり、海岸の、彼方、此方で、懐中電燈の光がして居ました。で、あたしは歸らう、としました。けれども男はまだ動きません。

その時、私はバラソルを手にして居りましたが、何の意識もなく、殆ど本能的に、薄氣味悪く落ちついた海面へ向けて、ぶーん、と投げ込みました。それを見ると、男も、どう云ふものか、

「歸らう」

と云ひ出しました。それで、あたし達は直ちに東京へ引つ返して來ました。

お店へ歸つて、あたしは、平素の習慣で、何気なく、お店へ出て馴染の客の側に行つて二言

三言話し、笑つたりしました。すると男が、あたしを戶外へ呼び出すのです。雨が、しよぼくと降り出して来て居ました。

「なあーに」

何気なく甘えたやうな調子で訊ねたあたしは、瞬間、男の狂暴な眼の光を見ました。と忽ちあたしは、雨傘で背骨の折れる程、打つて打つて打ち叩かれてしまったのでした。

「さうだ、あたしが客と口をきいたのを嫉妬して——」

と思ふと、あたしは、何だか、もう生きては居られぬやうな気がしました。

あたしは、男に、取絶りました。そして云ひました。

「死にます！ あたし、喜んで一緒に死にます！」

それが、最後の決意を固めた二人の瞬間でした。

## 死出の始末

翌日、即ち二十五日、あたし達は、いよ／＼死出の旅路へと立つた譯です。

あたしは、自分の寫眞を澤山、大切に保存して居ました。仲のよい友達と寫したのや、思ひ出深い土地の寫眞やら——。けれども、死んで行く身に、あたしの寫眞は必要はありません。それに悲しいかな、あたしには戀人以外に、あたしの寫眞を大切に記念に持つてなど、くれる人を見當らないのです。

あたしは、その寫眞を全部身につけました。そして男に伴はれて東京を出發したのです。

もう、これで、東京ともお別れか——さう思ひますと、時には悲しい涙で眺めたネオンサインも今では懐しいものとなつて來ました。あたしは眼を、ぎよろ／＼させて、東京の街を、まるで新しく來た町のやうに眺め廻し乍ら、

「これが見納め——」

と、つくづく感じました。

男も、矢つ張り、そんな気がしたのでせう。いゝえ、男は、なほ、そんな気が起きて、自殺の決心の鈍る事を惧れたのでせう。あたしの手を取つて一刻も早く東京を去らうと焦つて居るやうでありました。

二十五日の夜は、大磯の旅館で、此の世の最後の語らひを致しました。明くれば今日こそと決心した二十六日です。

日のあるうちは、まるで何と云ふことなしに、そこら邊りを、ぶら／＼して、そして夜になりました。あたし達は、もう、お互ひに何にも語ることはなくなりました。たゞ、黙つて、二人、寄り添つて歩いて居ればよかつたのです。

考へて見れば、あの自殺の一步手前の心が即ち天國ではないでせうか。何にも思ひませんで

した。たゞ、死んで思ふ人と添ひ遂げるのだ——と、そればかり思ひました。あたしたちはその晝間、大磯の劇場で芝居を見たのですが、遠い子供の時に見た、綺麗な俳優の心中の、あの繪のやうな場面、そつくりそのままの劇中の人になつたやうな気がして、まるで大地に足がついて居ないやうな、浮き／＼した心持ちでした。

夜になりました。あたし達は、此處を最後の場所と定めた照ヶ崎海岸へ出ました。

其處で、先づ問題は、あたしの記念物、寫眞の始末でした。

「あなた、帽子を貸して頂戴！」

あたしは男に云ひました。

「どうするんだ？」

「何でもいゝから一寸貸して下さいな」

男は黙つて、帽子をぬいで、あたしの手に渡して呉れました。

あたしは、たゞ、につこりして、男の顔を見、澤山の寫眞を取り出しました。そして、一枚、びり／＼引き裂いては帽子の中へ投げ込みました。

「どうするのだ？」

「寫眞よ、あたしが死んだなら、あたしの寫眞なんか見向いて呉れる人もないわ。あたし自分の死ぬのと一緒に寫眞も失くしてしまふの」

男は何とも云ひませんでした。あたしは、寫眞を細かく、細かく破りました。

「手傳つてやろう」

「え」

男も寫眞を破つてくれました。

その手許を見乍ら、

「あゝ、これで、あたしの過去、生きた歴史は消えて行くのだ」

さう思ふと、一寸淋しい氣になりました。

すつかり細かくしてしまふと、あたしは風の強い波打際に立ちました。

そして帽子を、すつ、と傾けたのです。すると、寫眞が夜風に、微かに白さを現はして、さつ、と海の方へ吹き飛んで行つてしまつたのです。

「あたしたちより、寫眞の方が一足先きへ天國へ行くわ」

あたしは、たゞ何氣なく云つたのです。がその時、何だか、何だか、悲しい氣持ちになつてほろり、と涙が出さうになりました。

戀に死ぬとは云ひ乍ら、誰れだつて、出来るなら戀に生きたいのです。死んで天國への戀！それは決して腹の底からの嬉しいことゝ、どうして云へませうか。

おゝ！天國へ



その夜は、漆を流したやうな、眞暗闇の空でした。それこそ、星影一つありません。波頭の白いのが、魔のやうに眼にうつるだけなのです。

あたしが云ひ出すと云ふでもなく、さりとして男が先きと云ふ譯でなく立上りました。時は十時にもなつて居りましたでせうか。

濱邊の小舟の中へ、男の駒下駄と、あたしの草履とを、きちんと並べてぬぎました。あたしは死後の醜くないやう、ズロースの紐をしつかり結びました。

「さあ」

と、あたしたちは、手を取つて、岩を一つ／＼渡つて行きました。

「これで二人は天國へ行くのだ——」

さう思ふと、今更、何の悔も、何の感じもありません。が、たゞ、あたしは、永い間、生きて來た世の中、あたしに取つては不倅せな世の中が、一寸思ひ浮んで參りました。

同じ心中をするにしても、生れ落ちるから何不足なく生きていらつしやつた大磯心中の五郎さんと八重子さん、それに生活の實戦上で、辛い事には幾度も出遇つたあたしたち、今、同じやうに天國へ行くのだ。あの人達の冥福に、あやかりたいと身を投げるのだ。と思ひ乍らも、其處に何かしら、淋しさが感じられます。けれども、あたしは男の手をしつかり握つて、

「うれしいわ」

と申しました。

「うむ」

男も答へて呉れました。

「成るべく、前の方の岩へ移らう」

と云ふので、あたし達は、岩を飛び越え、飛び越えして、一番沖の岩の上に立ちました。

その時、あたしは海を見て、これが水で一杯の海であるとは、ちつとも考へられませんでしたし

た。それは温い、ふとんのやうな、眞黒な綿のやうな、そんな気がしました。つい足で、とつと、踏んで行けさうな氣安い心持ちです。怖ろしい——そんな氣は夢にもないのでした。

——が、ふと、あたしは、男が、多少、水泳の心得があることを思ひ出しました。あたしは全然泳げないのです。

あたしだけが死んで、あの人が助かつて、そして亦、戀愛でもしたなら——さう思ふと堪りません。

あたしは、しつかり、男の首つ玉に、どうしたつて嚙りついて居ようと思ひました。そしてあたしは、その通り、男の首つ玉に、しつかり、しつかり嚙りついて、さつ、と身を躍らせて飛び込んだのでした。

苦しかつたです。あんなに苦しいものとは思ひませんでした。そして、潮水の辛いこと辛いこと！

あたしは、確かに、岩と岩との間に陥ちたな——と云ふ意識が働きました。

どうかして、岩の間から抜け出したい。とそんな氣が頻りにしました。けれども、それつ切り、あたしは全く、何の意識も失つてしまいました。

よく、死ぬ間際は眠くなるのだらう、と仰しやいます。けれども、そんなことはありませんでした。たゞ、ぼつとり、何も判らなくなつてしまつたのでした。

### 現實は悲し

救けられたのは午前一時頃と思ひます。約二時間、海の中に居たと思ひます。

救けて下さつた方は三人でした、あたしは救けられたと氣が着いた時、あたしの兩腕が岩と岩とに打つ突かつて、すつかり傷だらけになり、それに水がしみて、痛いといつたらお話にならぬ痛さを感じました。

男も助かつたか？ と心配したか——と仰しやいますの。え、男の方は、あたし、もう氣がついてから、確信して居りましたの。男の方は、きつと、あたしより、すつと、しつかりして居たであらう——と。

兎に角、その後の氣持ちは、そんなに、はつきりしたものではありませんでした。はつきりしましたのは大磯の警察で取調べを受けて居る時、ふと見ると、向ふに、男が矢張助けられて生きて居て、しかも、その傍に、男の妻が嚴然と、ひかへて居るのを見た瞬間でした。

あたし、その時、全く悲しくなつてしまひました。

「男と口をきいたか？」と仰しやいますの。いゝえ、ちつとも、一口も言葉を交しませんでした。だつて、直ぐ、男の妻に引き渡されて東京へ歸つて行つたのですもの。え、去る時も、一言も言葉は掛けては呉れませんでした。

あたし、その男とは一緒に死んだ程なのです。死んで天國へ行かうとした二人の仲なのです

あたし、もつと、何か深い趣味もあるものかと思ひました。それが、何としたことでせう。生き返つてみれば口一つきくことも出来ないぢやありませんか。言葉一つ、掛けては呉れないぢやありませんか。さつさと男は、その妻に引き取られてしまつて、あたしと云ふものは、まるで路傍の草とさへも見て呉れないではありませんか。

いゝえ、あたし、口惜しかつたのは、悲しかつたのは、如何にも情なかつたことは、あたしが、死ぬる爲めに大磯へ来た時は、もうすつかりお金もないことを男は知つて居た筈なのです。そして、男はまだ、金を持って居たことは、あたしは、よく知つて居ります。

けれども、あゝ！ 何と云ふ情なさであります。生き返れば、あたしだつて、東京へ歸らねばならない身の上ではありませんか。それなのに、それなのに、その人つたら、あたしと一緒に天國へ行かうとしたあの男つたら、あたしに、東京へ歸る旅費すら、置いて行つては呉れませんでした！

あたしは、心中の後の疲れ切つた身体と心を、大磯署の留置場に、二日二晩を泣き明かしたのです。なまじ、生き返つた悲しさを、これから生きて行く爲めの苦しさを、死なうと迄した男が、大磯から東京までの旅費さへ置いて行つてくれなかつた情ない身の上を——。

男には妻と云ふ引取人がある。あたしには何にもない——、悲しいく浮世の波が、心臓の鼓動が始まると、同時にあたしの胸に、ひたひたと押し寄せて來てしまつたのです。

「あたしのやうな、こんな因果な女が、またと世にあらうか」

義太夫の文句ではないが、さう思つてあたし、留置場で泣きました。身を、胸を絞つて泣きました。心中から救はれて、生き返つて引取り人も、東京へ歸る旅費もなくて、二日二晩警察の留置場に——。どう考へたら一體、あたしが、少しでも幸福の端にでも連れる身と思はれませうか？

### 人の情に更生の道へ

ですけれど、あたしを調べて下さつた大磯署の樋渡警部さん、此の方は全く親切な方でした。いゝえ、血も涙もあり永らく警察に勤めて、酸いも甘いも噛み分けて下さる方でした。あたしの行き場もないのを、如何にも氣の毒だと同情して下さい、丁度、あたしが居ました時に、顔を出されました大磯署出入の方に私の身の仕末を話して下さいました。そして、其の方のお世話で、此のカフェーに使つて頂くやうになりました、私は生れ更つたのですから萬事初めから、出直してやり直す、と云ふ心で勵んで居ります。

男のこと——、そんなこと、もう思ひ出しもしては居りません。思ひ出さうともしません。勿論、其後、何にも消息はありません、あたしは、あの生き返つて、始めて顔を見た時、もうお互ひに、すっかり別人になつてしまつて居ましたもの、おほい。

### 産褥 三態

一

永い／＼静養を強ひられる産褥の間に、婦人は深い／＼人生を見るのである。其處にはデリケートな思索が伴ひ、従つて懐しい又は厭はしい追憶があり、涙ぐましい感激が生れると同時に或は新生の歡びを味ひ、或は地の底に沁む嘆きに唇を噛む。それは時に天國であり、時に地獄である。産褥の種々相こそは嚴とした永劫の婦人の哲理である。

私は私の知る珍らしい産褥の三態を想ひ起して、あへかなる女性の心理と新らしき母性の芽とを究めようとする。

×

×

×

妙子は夫が事業を計畫して、又もや支那へ渡つてから半歳以上も経つたので、廣い家の不用心と手持無沙汰とから、確實な紳士を御賄ひしたいから探して呉れと私の友人に依頼したのである。そして間もなく私が妙子の家の間借人となつた。つまり、確實なる紳士として私が選ばれたのだ、誠に苦笑千萬だが折角の友人の折紙付きなので早速にも其の光榮を擔つてしまつた。妙子は貞淑と美貌とで評判のよい小柄な氣質の優しい女であつた。彼女には六歳の女の兒が一人あつた。けれども其の子が父と一緒に居たのは一年限りだと云ふのであつた。つまり妙子は、其の子を産む早々、結婚後やつと一年経つか経たないかに夫に支那へ行かれてしまひ、五年の空閑を守り續けたのであつた。そして久し振りに親子三人の生活が惠まれたがそれも僅かに一年、またもや夫は支那へ旅立つてしまつたのだ。

私が引越すると直ちに此の六歳になる女の兒は私に懐いて、

「おぢちゃん！ おぢちゃん！」

と云つて傍を離れない。父の味を知る事の薄い子は、こんなにも淋しがりで人懐かしいかと思ふと、つい、いぢらしくて、私は我子のやうに可愛がつた。妙子は、それを非常に喜んだ。黄昏になると私は、妙子と其の一人の女兒とを連れて灯つた町並をよく散歩した。時折は、その序に寄席へも立ち寄つた。そんな時私は、これが本當の家庭だつたら——ふとさう思ふ時があつた。すると、それが嫉ましいまでに幸福なものに思へてならなかつた。私は人知れず頬を染めた。

その中に、私は、ふと妙子が來客毎に私を「弟」だと言つて居る事を耳にした。最早其の時結婚年齢にも達して居た私は、其の言葉を頗る意味深長なものと祕かに解した。そして妙子が離れて久しく音信のない夫の事を情けなく口惜しく冷淡だと怨ずる風情の時には、私は、こんな妙子程の女性を持ち乍ら何と云ふ「罰當りだ！」と其の夫を罵つて見たい氣分になつた。まだ、純情で世間を餘り知らなかつた私は、或夜の夢に、彼女が夫に捨てられたので喜び勇ん

で其の女兒と共に彼女を引取つた事を見たりした。

私と妙子とが打ち連れ立つて散歩をし過ぎる事は猜疑深い、おせつかいな世間の眼に、いつしか眼觸りなものとされたらしい。妙子の家へ私を紹介した友人迄が、

「君、あんまり奥さんと親し過ぎやしないかね、大夫丈かね？」  
等と尋ねた。

「冗談云つちやいけない、確實な紳士と誰れが折紙を付けたんだい！」

「え、さうか、それさえ覚えて居てくれりや安心だ」

友人は喜んで歸つて行つた。だが、そんな時があればある程、私は妙に妙子に息づまるやうな、正視出来ないやうな氣分を感じた。

そして私は、そつと鏡を出して、我が顔と妙子の顔とを見較べるのであつた。妙子が弟だと云つても、誰れも疑はない程に、成程何處かよく似て居る。しかし、兄弟でないことが、どん

なに幸福か、など考へて私は思はず恥しくなり鏡を伏せたりした。

と、間もなく、妙子は夫が出張する直前の胤を宿して居て、産褥に就いたのである。夫の不在中に婦人の大役である——とすれば私は私の能ふ限りを盡して妙子を力づけたかった。また力づけました。

しかし、間もなく妙子の母親は上京し、出産の準備は萬事整つた。私は、たゞ言葉で彼女を力づけるのに止まつた。

或日、心懸りで勤め先から、少し早目に帰宅して見ると、彼女のお産は最早済んで居た。産室へ入ると彼女は昏々と眠つて居り、其の傍に母親が嬉し気に生れ出た孫の顔を見据ゑて居た。私はふと彼女の枕許を見た。と、どうだらう、其處には禮服を着た妙子の夫の寫眞が飾つてあり、妙子の産褥は、何と夥しい夫からの手紙で埋もれて居るではないか！

「手紙に見護つて貰つてお産をするからつて申しまして、まあ、こんなに夫からの手紙を散ら

したので御座いますよ、おほ、でも安産でしてね、それに男の子でせう、だから寫眞に似てるかと繰り返し聞くのですよ、え、瓜二つよと云つてやりましたらね、おかしいぢやありませんか、寫眞に向つてね、あなた！ ほめて下さいな、男の子ですもの、あなたに生き寫しですつて、ほめて頂戴つたら！ なんて大喜びで寫眞に甘えて居るのですよ、本當に早く夫に見せたいのでせう、おほ、大手柄のつもりでね、おほ、」

聞いて居る中に私は胸が迫つた。寫眞に向つて妙子は微笑し乍ら眠つて居る、不覺にも私は涙が、ぼろ／＼と出て来るのを止められなかつた。何とも云ひ知れぬ感情の波に煽られて、私は足音を忍んで戸外に出た。

慌しい街頭を、ぼんやり瞞めて立つて居た私の瞳は、いつまでも曇つて居た。

小料理屋の娘であつた彼女が、震災後店の立ち行かなくなつたのと養父母を扶養しなければならぬ必要から、静香と名乗つて左棲を取つて間もなく某男爵の寵愛を受けるやうになつたと聞いて私は何故か、ほつと安んじたやうな気がした。幸ひに、さうして何等かの安定を保たれ、ば、所謂不見轉藝者の煉獄の苦しみから僅かに逃れられることを私は知つて居たから——間もなく静香は妊娠した。それと判ると男爵は一層、静香の處へ足繁く通つた。そして生れた子は男爵に係らず男爵家へ引き取つて立派に育てる事を言明した。

静香の養父母は非常に喜んだ。男爵家から届いた、たつぷりな静養費、それで静香を連れて鎌倉の海岸へ来た。男爵家からは其處へも頭の禿げた執事が来て、首尾よく身一つになつたら静香は小間使として静香の養父母は別荘番と云ふ名儀で屋敷へ引き取るからと云ふのであつた。

「本當に藝者稼業などに身を落してと思ひましたら、思ひがけない運に恵まれました」  
静香の養父母は、ほく／＼して盆と正月が一時に來たやうに上機嫌であつた。

「これの産んだ子が、男爵の若さま、女だつたら、お姫さまになるのですもの——」

「おめでたいね」

さう静香に祝意を表すると、彼女も嬉しさうに、そして恥かしさうに、もはや間近い臨月の腹を抱へて、肩で吐息して居た。だが私には其の瘦せた頬の窪みが何となく、此の喜びの空気とは反對に、さびしい氣の毒なものに思へた。

それから、しばらく経つて、もう私は、とつくに静香一家は男爵の家へ引き取られたとばかり思つて居た處へ、それこそ、しよんぼりして静香の養母が私を訪づれて來たのである。

「どうしたのです、男爵邸の生活が餘り幸福過ぎて、其の呼吸抜きにお遊びにいらしたのですか？」

と云ふ私へ、泣き出しさうな顔をし乍ら、

「それがですよ、あんな不幸ものの罰當りたらありやしませんよ、玉のやうな男の子を生んだ



のですよ、で、男爵家から大喜びで迎へに御いになつたのに、あなた、情けないぢやありませんか、彼女はどうしても離さないのですよ。いゝえ、産褥に居る間に、此の兒は男爵様の若君になるのだ、何と云ふ幸福な兒だなど、云ひますと、むつとして涙ぐんで居るのです、産後だからと思つて我慢をして居ましたら、今度は男爵様と手を切つて、又藝者に出でしまつたんです、今時、子持藝者なんか、なんで賣れませう、あなた、御願ひですから、靜香に意見をして下さいまし、こんな幸福を取り逃すなんてそんな馬鹿な奴があるのですか！

と云ふのだ、私は養母をなだめて歸して其夜、靜香に會つた。そして養母の意見を傳へてやらうとした。

靜香は、産後の肥立も善かつたと見え、妊娠當時の疲れを取り戻して反つて艶めかしくなつて居た。私の話を聞きとると、彼女は、ほつと、溜息を吐き乍ら云つた。

「産みます迄は、男爵邸へ引き取られる事を幸福と思つて居りました。けれども、産まれた子の顔を毎日々々寝て居て見て居ます中に、此の子が男爵の若様で育つとしますると大きくなつて、いつかは自分が藝者の腹から産まれた子であると知り、自分の祖父母はそれが爲めに引き取られた別荘番だと判りませう。さあ其時、この子はどんな心地がするでせうか、なまなかに、若様など、煽てあげられて育つたばかりにそれこそ幻滅の悲哀とやらを感じて、どんなに自分自身を惨めなものに暗いものに、考へ、終ひには自暴自棄になつて母や父を恨む様になるかも知れません。それよりも私、子供は初めから、藝者の子なら藝者の子として育ち、腹の中、せめては父が男爵であると云ふプライドをもつて居てくれた方が、餘計間違ひないと思ひますの、男ですもの、きつと大きくなつたなら其の方を喜びますわ、立派なお邸で綺麗な着物を着せて貰つて、冷たい眼で取圍まれるより卑しい藝者の子ではあつても、本當の母親を公然と母と呼んで、濫かい心で包まれて育つた方がどんなにいゝか知れないと思ひますの、だから、あたし、世間が笑はふと子持藝者で送りますの、ね、あたしも、それでこそ心が落ち付きます

わ、人間、どんなになつたつて卑屈な氣持で生きるのは眞平ですわ」

さう云ふ靜香の顔には明るい輝かしい美はしさがあつた。

私は、もはや養母の願ひを強ゆる言葉が吐けなかつた。そして此の靜香にこんなにも明確な人間としての意志を持つやうな轉機を與へた産婦に祕かに頭が下がつた。

## 三

私と斷髮洋装の久子とは霧の濃い晩、海岸を歩いて居た。久子は濱の匂ひが嗅ぎたかつたのださうである。だからして一年も音沙汰なしで突然私の書齋を訪れると、矢庭に海岸に引つ張り出したのである。久子は本當の所謂モダン・ガールであつた。餘り美人とは云へないが顔面筋肉の洗練された活躍は、眼と云はず口許と云はず、甚だしく魅力を持たせた小柄で活潑で、明朗で浮氣で、それで居て何かしら永遠のパーチニテイを持つて居る久子には、私の心は、非

常に惹き付けられて居た。

霧は深く風はなかつたが寒い晩ではあつた。彼女は、例の活潑な步調で歩いて居たがつと私の手を執ると、突然、

「あなた！ 寒いわ、そのマントの中へ入れて頂戴！」  
と甘えた。

その時、初めて、私はマントを着て居た事に氣が付いた。そして彼女の肩をマントで包んでやつた。

「あなた！」

久子は、ぐんぐん身體を押し付けて來た。

「あたし、一年前、あなたにラヴを感じて居たわ。で、よく接近したの、でも、あなたつたらまるで直感意識を働かせなかつたわね、あたし癩にさはつて淋しかったのよ、であたし、でた

らめやつちやつて、今の戀愛では煩悶してるのよ。みんな、あなたの所以だわ」

「へえ——、する分お勝手な議論だね、一向意志表示もしなかつた癖に、ラヴを感じて居ても毎日の浮気で忘れつちまつて居た癖に。それにしても、君が煩悶するなんて、をかしいね」

「をかしいわ、だから煩悶しなきゃならないやうな、煩悶する處に重心のある戀愛なんて眞平だわ、あたし、また、あなたにラヴを感じちやつた。今、とても加速度なのよ、諒解して呉れる？」

「だつて君、僕はモダンぢやないんですよ、臆病な舊式な男ですよ、眞實以外に女性に話しかけられない男なのですよ！」

「さう、その眞實があたし欲しいの」

久子は、さう云つたかと思ふと、立ち止まつた。

「あたし、決めちやつたの、あたし斷然あなたのものよ、さ、接吻して頂戴、今、すぐ、ぐづ

くしちや、いや！」

彼女は私の腕の中で眼を瞑つた。そして足踏みして接吻の請求だ。場所は海岸とは云へ此處は相州杉田の大通り街燈の灯明るく、人通りだつてある。

私は躊躇した。私のやうな孰れかと云へば陰性の人間には久子のやうな明るい女性が人生の伴侶として欲しい。——久子は

「早く、さ、早く」

駄々だ。私は久子の魅力と勇氣に負けた。

「三日待つて、ね、伯父さんの家、うるさいから荷物を持つて飛び出しちまつて行くから——」  
さう繰り返し云つてから、

「忘れちやいやよ、きつとよ！」

別れ際に久子は私の手を振りしめて幾度も念を押した。

私は障子迄張り替へて彼女を待った。が、約束の三日目には来なかつた。いや五日経つても六日過ぎても影も見せない。

喜びが早かつただけに、悲しみも亦早かつた。氣抜けのした私を、がっかりさせてしまつたのは六日目に來た封緘葉書の

「都合に依り凡てを忘却の國へ追放遊ばされ度……」

との素氣ない斷り狀だつた。勿論、住所も記してなく、消印は想像もつかない遠方であつた。

私は、所謂モダン・ガールが、そんなにも簡単に、女性の或る最も重要な契約の表現を捨て、顧みないかと思ふと、情けなくなつてしまつた。

そして一年は経過した、もと／＼久子は私の、義姉の友人であつたから何とかして義姉から其後の久子の消息を知らうとした、が徒勞であつた。

ふと、私は或日、義姉の宅を訪れた。と其處に久子が居るではないか！ しかも臨月の腹を

抱へて……「モダン・ガールが妊娠するなんて、一寸變てこだね」

私は、襖の蔭に逃げ隠れた彼女に恬淡に云つた。「だつて、あたしだつて、矢つ張り女でしたものね——」

久子は、私の恬淡さに安心したものか、出て來ると一寸さびしさうに、かう云つた。

女でしたものね——、私は其の言葉の中に彼女が産褥に直面して人間性のイタについての事が判つた。

久子は妊娠を發表すると引かへに情人に捨てられた。そして平素は、平凡だ、何の感激もない意屈な生活だと輕蔑し切つた私の義姉夫婦に縋つて、淋しい分娩をしたのであつた。

久子は産褥で、充分に友人の夫婦生活を所謂單調で平和な生活を見続けた。そして生れ出た兒を我子のやうに愛してくれるのを見て久子は涙ぐんだ。

どんなに平凡と云ふ生活、變化刺戟のなささうに思へる舊式な夫婦の生活の中に汲み盡せぬ

味があるかと不覺にも今にして、漸く判つたやうな氣がして——。さうした生活には愛の貯蓄があつた。愛のブルジョアであつた。モダン・ガールの單調に非ずと自認し刺戟として誇つたものは、それは愛の其日稼ぎに過ぎなかつたのだ。云ひ換へれば愛の無産者であつたのだ。モダン・ガールが想像も及ばぬ法悦境が平凡な夫婦生活にあつたのを、知らずして輕蔑したのは何と云ふ愚の骨頂だ！

「あなた！ 凡てを許して、お願いですから平凡な靜かな家庭生活へ連れて行つて下さい！ もう、決して申譯ない事は致しません、あたしは、生れて來た兒の爲めに人生の本當の姿を見せて貰ひました。あたしは此の兒に母がこんなであつたのを知られるのが恥しいのです。子供は郷里の母親に、しばらく育て、貰ひます。そして立派な母としての修業を先づ積んで見たいのです。あたし、眞劍にお願いします、あたしに、平凡な普通の婦人の幸福を與へて下さいまし！」 久子は、急に、

「呀つ！ でも、あたしには、それをお願いする資格がもうありません！」

「おつと、心配なさるな、それでは僕が——」

「まあ！ 嬉しい！ でもあたし、随分圖々しいですこと、おほ——」

久子は、そして如何にも可愛ゆくて堪らぬと云ふ面持で乳兒をさし覗いた。もはやそれには所謂モダン・ガールの影は無かつた。矢張り尊い新らしい、一つの母性の芽であつた。

## 去つた五人の女性達へ

——破綻に呼び掛ける手紙——

### 悲しき病を持つたT子さん

驚かされると云ふことも随分魅力を持つものですね、さうでした、貴方との交渉は驚きに始まつたのでした。

處は——春でしたね、水車が水晶のやうな水玉を惜気もなく撒き散らして居ましたね。そして、草萌えて、牛が欠伸をして、陽炎の立つた廣い原を嚙喰たるラツバの音が流れて行きましたね、富士山麓三島野砲聯隊の面會所

豪放で洒脱だつた筈の洋畫家Y君、一年志願兵で入營匆々、悲鳴を擧げて來たので柄にもな

い私が慰問に出掛けた時でした。慰められるのがダブ／＼の軍服を着た六尺豊かな偉丈夫、慰める私が至極かわいゝ體格。兵隊さんでなかつたら、本職の稚氣が漫畫化するに違ひない光景だつたのです。嬉し涙をぼろぼろこぼして、空きつ腹を訴えたY君が、やつと満足したので、

「ぢや」

と腕時計を見て歸りの汽車の時間を氣にして立ち上つた時、さうです、貴女が生れて初めて私の眼の前へ、其の異つたかたちを見せて呉れました。

「おや、やつてるな」

流石はY、悲鳴を擧げ乍らも逸材だ、早、こんな傑作をつくつたな、と、感嘆久しうして居ると、

「まあ、よくYさんを訪ねて下さいましたこと、お話承つてよ。今夜は是非あたしの家で泊つて下さらない、いゝでせう、ね、ね、ね」

去つた五人の女性達へ

しかも私は貴女に手を執られて居ましたね、Y君の前で。  
のんびりした三島で、餘りの事に呆氣に執られた私は、これも柄にもなく頬を染めて妙な気分分で兵營を出ました。

それ程、貴女は積極的でしたね、その夜、一つ部屋に床を並べて、寝轉んで煙草を喫つてウキスキーを飲み交して——私は貴女の正態が判りませんでした。そしてYに何となく濟まない氣もしました。

——が、あの眞夜中の猛烈な咳嗽、燥き切つた貴女が死人の如く蒼白になり、また火達磨のやうに紅くなるのに驚きました。それよりも起き上つて貴女の背を撫でにかゝると、

「投つておいて、すぐ癒るわ。あたし肺病なの！」

そのメスのやうな言葉が私の胸を刺しました。

と共に、急にすべてが明瞭になりました、貴女が上野の音楽學校を中途退學の已むなき理由

も、かうして實家と一町と隔たらぬ場所に別居して居られることも、そして興奮して私を拉して來られた心持ちも。

貴女は淋しかつたでせう、親の慈悲で、總ての令嬢としての束縛を解き放たれたことが病氣故に、どんなにかお淋しかつたでせう。

その當時の私は一と先づ放縱な生活を整理しようとして居ました。そして、爲めに少女讚美者で殉情主義者でありプラトニック・ラヴの信仰者でした。何と云ふおあつらえ向きだつたんでせう、病苦に悩む貴女のいたいたしさが私を捉えました。その上、貴女の投げかけた信頼は素晴らかつた。加ふるに貴女の周囲が、貴女に夫らしき友人を秘かに求めて居られた事實がある。私と貴女とが、それが他人眼にはどうあつても、夫婦だと思はれる間柄となり、貴女は常に東京の私の下宿へ來て泊り、私は貴女の家へ主人の如く納まりに出掛けました。友人Yの軍隊生活を慰問する——それは、またとない、いゝ口實でした。Yと私との交友は背後に貴女と

云ふ人を持つて表面又とない濃かさを呈しました。

で、當然、貴女と私とは家庭結婚に、貴女の健康が恢復すると共に入るべきが常識で考へられる世界でした。しかし、貴女は去りましたね。

去る妻のいとしくも追はじ春の星

私は大悟ぶりを見せて此句を吐きました。さうでした。貴女の病苦に深い同情と理解を持つた私の體軀に、その時、同じ悩みが重いか軽いかの違ひだけで、存在はして居たのです。同病相憐の感情に出發したものは、一方が、今一息で健康圏内へ入らうとするときは、一切の同病者に嫌惡の情を感じて眼を閉ちます。そして、過去の病を少しでも思ひ出させる事を拒みません。従つて貴女の心が、ひたむきに健康そのものである男性へ慕ひ寄つて行つたのは無理ありません。病の調子の破れる時は愛の調子も破れるものです。

たゞ、永遠に貴女が其後選んだ家庭結婚の夫に、

「あなたはあたしの病氣に理解がない！」

と呟くことの、こぼすことの斷然オール・ナッシングであることのみを今は祈つて居るのです。

### 眞珠を泥沼に求めたK子よ

僕が、お前を、僕の分身のやうに考へてから同棲する迄の歲月、それは永かつた。

まだ、下げ髪の頃から知り初めて並びの年齢まで、前後七ヶ年、初めは僕は「繪畫きの優しい兄さん」だつた。

「僕の商賣、何に見える？」

「判つてるわよ、繪畫きの兄さん！」

その時、お前は、酒の席で酌をさせるには餘りにも、いたくしい程小さかつた。だから、

去つた五人の女性達へ



きつぱり、繪畫きと斷定してしまふお前に「違ふ」とは可哀さうで云へなかつた。

「うん、えらい、あつた」

「でせう、あたいたつて判るわよ」

お前は得意氣に、につこりしたね、だから僕は繪畫きに成り済まして居た。とう／＼、一緒に  
なる迄、云ひ出す機會を持たずに――。

お前は商賣に熱心であつた。淺草の小料理屋の養女として、感服に堪へぬ努力であつた。誰  
れ彼れの嫌ひなく、来る客、来る客に、

「兄さん、兄さん」

と、さも親しげに呼びかけては慕ひ寄るやうにした。けれども、時間で店を閉めると、

「ねえ、兄さん」と云つても、本當の兄さんはあんた一人きり、ねえ」

など、甘たれた。そして、床の間に繪を持つて來い、額に繪を持つて來い、等とせがんだ。

だからして僕は、友人の、これは本物の繪畫きに頼んでは畫いて貰つて持つて行つてやつた。

お前は僕が、店の看板前に歸らうとするのを何時でも止めて放さなかつた。そして、更ける  
のも、おかまひなしに僕に對座して、僕の顔を眺め乍ら酌をして養女としての身上話に耽つた  
そして、

「兄さんなんか幸福だわ、いゝ御身分ね」

など、何だ彼だと身上のことを根掘り葉掘り訊ねた。勿論僕は其の時／＼の酔ひ心地で與太  
を飛ばした。お前の心に、だん／＼僕の影が濃くなつて行つた。年と共に、そして僕も年と共に、  
お前を、かはいゝ酌人から祕かに心の王座を占むる女性とした。

お前の前に現はれる僕は何時も景氣がよかつた。陽氣であつた。苦しみ、悩み、悶え、煩ひ  
そんなものは影すらも見せなかつた。その筈である。金の無い時は、苦しい時は、僕は意識し  
てお前の前になかつた。そして、よしんば多少の苦しみを抱いて居ても、お前の前に現はれ

れば僕は其の苦しみから脱れ得られた。

お前は信じ切つて何事も打ち明けた。だから僕はお前の憐れさをすつかり知つた。けれども

お前は僕を幸福人とのみ信じ切り、酒席での華かさのみしか知つて居なかつた。

そして、七ヶ年後、お前は僕を所謂世間並の夫とするに及んで第一に叫んだ。

「まあ！ 繪畫きちやなかつたの！」

酒席の與太に何の責任がある！ お前は僕の凡てに疑ひを持ち始めた。急激に崩れた信頼、

其の隙へ私の日常生活の暗い苦しい一面が辻斬の刃の如く割り込んだ。

それですら、七ヶ年の歲月は、お互ひの情熱を灼き盡して居た。改めて家庭的な生活

へ入つても、何のフレッシュな感覚もなかつた。退屈であつた。

で、お前が逃げ去つたのは當然過ぎる當然さだ。けれどお前に今でも心から云ふ。

酒席の與太に信實はない！。

### 聰明過ぎる奥さん

奥さん、本當に貴女にはお氣の毒を致しました。でも、貴女は私のことを考へて下さる時に何となく、につこりなさるでせう。私も同様、奥さんのことを考へると理由なしに微笑まれるのです。

思へば薄氷を踏むやうな思ひの生活乍ら、何と云ふ朗らかさであつたのでせう。それは求むるものが與へられた時の表象でした。きつと、きつと、それに相違ありません。

奥さんが所謂「人形の家」から、しかも自己の力で生きる生活をも要望して眼ましい一轉機を劃された。積年、夫の放蕩に侮辱に忍従の底に涙を呑んだ従順貞淑な貴女が、俄然奮然と侮辱の愛撫を蹴つて立ち上られた時に、其の影に私への思慕が慥々として動いて居たと云ふのは、何たる選まれた幸福でしたでせう。

そして奥さん、それは内部から自覚した婦人を待設けた私に非常な勇氣を與へました。戦鬪力を與へました。私は奥さんが、男性の卑怯な未練のわなに掛らうとなさるのを勇敢に防禦しました。奥さんが私へと飛び込んだ其の熱と眞實とを唯一の楯にして――。

がです、茲に哀れを止めたのは現行戸籍の法規です。奥さんは素より覺悟して、私へ飛び込む前に離婚は要求していらつしたが、それを許すことは男性の未練深さが承知しません。で、法規に従ひ重大なる侮辱と虐待とを理由として離婚訴訟を起さうとすれば、それ先方は折こそよけれど引きかへに、忌はしい告訴を提起しようとするのですから堪りません。奥さんはお身體が纖弱、私とても甚だ病弱、所詮刑罰を越えて戀愛の殿堂を築くことは不可能でありました。

其處で二人は死を選ばない限りは、公然と現行法規の上で夫婦たる事が叶ひません。勢ひ、浮世を外の生活へと入るべきだつたのです。

だからして奥さん、二人が名も捨て、望も捨て、寒村に立てこもつたのは至極道理でした。そして、生れてから三十幾歳迄女中なしには一日も暮したことの無い所謂、貴婦人の貴女に、味噌漉し箆を下げ、糠味噌へ手を入れる生活が始まつたのでした。

けれども、あの炎天に、私に傘をさしかけてさせて漁夫の妻と同じな簡易洋装の姿で、洗濯をなすつた時の嬉しさうな顔、うどん粉で手製の菓子を作成した時の若々しい悪戯染た笑ひ、新聞の小説を抜け駆けで讀むのを禁じた家憲、あゝ、何と云ふ潤つた幸福な一年だつたのでせう。だのに、私達の愛の飢渴が満たされた頃、突然、私の弟が長逝しました。それが動機となつて、それ迄二人が忘れて居た二人の各々の肉親への愛情が忽然として甦つて來ました。それ故、貴女も其の隠れた樂園を現はれた樂園としようとして再び企てた事に私は些かも異議はないのです。否、寧ろ、奥さんに久瀧に郷里へ姿を見せて老いたるお母さまに安心させなさいと奨めたのは私でした。

が、何と云ふことだつてせう、それが再び奥さんを以前の渦の中に捲き込み、永遠に私と訣別の已むなきに到らしめたのです。

そつと、老いた両親の監視の眼から逃れた奥さんが、楽しかつた私達の隠れ家へ来て、外出から歸つて来る私を待つ間の思ひ出、それはどんなに何處を切つても楽しかつたことせう。私とて、歸宅して奥さんを発見した驚きに續いて訣別の辭を聞いた時には、さうでした、ピストルの前に身を投出して奥さんを防禦した私、あらゆる秘策を盡して奥さんの熱と眞實に答へようとした間斷なかつた活動がパノラマの如くに思ひ出されました。

然り乍ら、奥さんは唯一人が何の混り氣もなく純粹に捧げる愛と、働いて食ふ生活の愉快さを飽喫されたのです。私とても奥さんの女性の通有性たる功利を度外視した愛情に一年間溶け浸つたのです。

X

X

X

それ故、お互ひに自我を持ち得なかつた、投げ出し合つた二人に、いみじき愛の榮光があつたのでした。だからして奥さん貴女は、永遠にフレッシュな私の戀人であり得るのです。貴女も、きつと、さう思つていらつしやるでせう奥さん！

### 生人形のF子さま

実行力なき意志は、意志なきと同一と存ぜられ候。貞淑にして温雅、しかも大和風なる美貌の御身に、小生とは斷ち難き意志のある事充分推量は、仕り居り候。然れども結局、貴女のその、愛戀の心情が表面に現はれるのを許されず事實は御身の意志なりとして愛戀を斷たれ候。事なれば小生としては貴志を拘むべく一寸の隙だに不幸にして御座なく候。

御身が其の美貌にして二十七歳の晩き迄縁遠かりしも一は此の実行力なき意志の所有者たるに由ると愚考仕り候。その上に經濟力が伴はざりし事も重大なる原因と存じ候。されば經濟難

を突破して結婚難を脚下に踏みじらん爲めには何よりも実行力のみなる意志の必要こそ最大要素に候

然るに御身は父母の意のまゝなる「悲しき玩具」に有之候。これをこそ世の所謂「孝行者」と御身は確信致し居られ候。眞の孝行は本當の個性の伸暢發展であることに露心付かれず——御身は父母の許す間小生を愛され父母の許さざるや行人のごとく無關心にならるる、そして自らの運命に甘き嘆きの涙に淫することの如何にも立派に、健氣なるやう誤認致し居られ候。

御身のごとき実行力なき意志の所有者、換言すれば父母の意の儘にして些かの自己を有せず従つて、世間並極めて通有なる家庭生活の摸寫に價値を持ち、お互内部精神の充實などは二の次三の次と存ぜらるゝ婦人の昭和新時代に在せらるゝ事は寧ろ奇蹟に御座候。

父母のスワッチに依つて愛が發動し又は停止するとせば、やがて來るべき時代に技師に依つて愛の發動を左右さるべき人造人間と同じく、御身の存在は一面には戰國時代の生きたる遺品

であり一面には未來の機械時代の象徴たるやに考へられ申候されど、いつかは御身は御身自身の手にて愛のスワッチを切るべき時來るべしと存ぜられ其の時の頼りなきはかなさの思ひさぞかしと今より推察するを憚らず候。

愛こそは重大なるものに候。愛こそは天地を貫く大道に候。假にも夫として御身自身の發動に成らざる愛を受けたりとせんか、それは要するに晝きたる鯛に候。形は愛に似れども腹充ちざるものに相違無之候。

たゞ思無邪の御身に對し実行力なき意志の所有者たらしめしは一に父母ののりを越えたる盲目の愛に候。則をこえたる盲目の愛は即ち御身を一女性として存在せしむべき場合の鐵鎖に有之候。それは愛すること即ち苦しめることに候。御身の場合の女性解放は、先づ親の手から殊にめちやな母の盲愛から始めざるべからざるものと愚考仕り候。

結婚後直ちに入籍を爲さなかつたからとの理由で素氣なく一年の家庭生活を捨てられし御身

達は、家庭の事情に依つて分家の上自由結婚の形式を取らんと主張する小生の言に耳傾く術も候はざりし、されど結婚は決して籍の移動が主體ではなく、籍の移動は結婚後の一つの事務に候其の事務の速速に依つて主體を決せんとは——其の心事諒するに困難を覚え候  
たゞ形式主義結婚に満足せらるゝ御身の満足と幸福の爲めに小生は、自覺の風の御身には吹くまじきことを一筋に御身の爲めに祈願するものに候

### 知られ過ぎてたJ子君よ

「だつて、あなたにはあたしが満足する程の體力がないと思つたのよ、勘忍ね、おほゝゝ」  
君は一度、僕の求愛を蹴つて去つてから、舞ひ戻つて、僕の胸に凭りかゝつた時に、さう云つたつけ、さも満足氣に。

「本當に、こんななんだつたら、もつと前にラヴすればよかつた、損しちやつた！」

とも云つたね。君は勇敢な職業婦人だつた。そして其の服装がよく表現して居たやうに、ぎらくする程な、幻惑する程な、けばけばしさの好きな、現實そのものゝ女性だつたね。しみみり、しみみりなんて言葉は君には必要がなかつたんだ。君の愛も食慾と同じであつた。ラヴをすることも化粧室へ入ると同じ程度に必要だつたものに過ぎなかつた。尠くとも君の生活には未來はなかつた。若しかすると現在もなかつたかも知れぬ。それは浮游の瞬間であつたかも知れない。

其の君が人生の扉に打つ突かつたんだ。濃刺たる君の名譽の爲めに其の原因を素破抜くのは止める。しかし君が、しよんぼり、柄にもない沈み方で、悲しく瞬きして、僕の胸へ戻つて來た。そして、

「しみじみつてこと、本當にいゝことね」

さも大發見したかやうに、それこそしみじみと云つたつけな。

そして君と僕とは、しみじみと愛を吸ひ合つた。君は僕のしんみりさに酔つた。そして過去を泡沫のやうな、パンくずのやうな戀を嘲笑したのだつたね。

だのに、僕だつて、君の華やかさに、君のけばけばしさに、君の法外な熱に參つて居た筈なのに、あつ氣なく喧嘩別れをしてしまつたね。何故だらう、君と僕とは又、チャンスさえありば寄り付きさうな仲好しであり乍ら――。

ね、君、それは嫉妬に食ひつかれたんだよ。君が僕のしみじみに參つた時、さぞかし君は思つたらう、前のKさんも、その前のS子さんも其のまた前のTちゃんも、此の人の此のしんみりした味を味つたんだわ！と。

そして僕も、君の熱い唇に心を灼かれて居る時に、矢つ張り君の以前の戀人が幾人も幾人も思ひ出された。さうだ、あいつ等は此の熱愛を、此の技巧を、もう、すつかり飽く程、知つてゐるなつ！と。

其處にお互に愛し合ひ乍らも、お互ひの過去へ齒ぎしりして憎惡を投げつける嫉妬があつた。いらくし出した。

「君は、もしや裏切つた彼奴が忘れられずに秘かに彼奴と思つて僕を抱擁するのではないか？」

「貴方は、あたしを、あの方の代用に、思ひ出の方便にしてるのぢやない？」

それが、その考へが、お互を氷結させたので、一寸した事に喧嘩別れをしたつね。

君！ 過去を知り合ふことは、戀愛にも結婚にも致命傷だね、はゝゝ。

## 流浪線上の處女

——餘りに生理的に——

### 絶たれた感激

思ふ存分、泣くことの出来るのは幸福だ。思ふだけ、笑へるのも亦幸福である——が、笑ひを涙を制限しなければならぬことは、人間、何と云つたつて不幸だ。

それも、感情的に、世間的に、または見得坊に、喜びを悲しみを制御するのであるならば、それは又、秘かに泣ける場所も笑へる場所も、見當るであらう、さうでなく、絶對的に、或る程度までしか泣けぬ、喜べぬ、笑へぬとしたら、その人の人生は何と云ふ窮屈な、何と云ふ、いぢらしいことであらう。

その人を私は知つて居る。

水郷の春であつた。

私は、芦の風に追はれて這ひ出た蟹を追ひ乍ら、明るい氣分で話し掛けた。

「どうして、そんなに離れて歩くのです？」

その人は、美しい瞳を擧げて、微笑した。

「お願いです、傍へ、おいでになつてはいけません！」

私は驚いた。で、

「何故？」

と問ひ返した。

明るい、何一つ暗さを持たぬ水郷の春の朗らかさの中に、たゞ、一翳、彼女の顔にのみ淋しさがあつた。



眼を伏せて、

「あなたが、好きだから」

と間を置いて云つて、ほく、と笑つたそれが、又、こゝだけにある淋しさであつた。

私は、奇妙な彼女の言葉の疑問を解かうとせず、まぶしい陽を仰いだ。

宿の娘、此の水郷一の素封家の娘、美しい、英文を東京で専攻して來て遊んで居る處女！

いつでも情熱に燃えることの準備された瞳、明るい笑の顔、事實、明るいのである。そして

何處迄も潑刺として居さうな、凡てとあつて、そして 不思議にも私は長い滯在中に、彼女の

高笑ひを知らないのである、と同じく、彼女の涙も知らないのである、又、勿論、はしやき切

つた彼女も見ることがない、處女特有の興奮した話しぶりも――。

しかも、彼女は、明朗だ、それで居て何かしら、一抹の不安を、明朗の底に湛へて居る彼女だ。

「あなた、なんかには、縁談が降る程あるでせうね」

足許の小石を蹴飛ばせて、私は、無遠慮に訊ねた。

「えー」

と悲しさうだ。

「矢つ張り、縁談なんて云ふものは、澤山ある方が、いゝんでせう、それを選び好みして、贅

澤を云つて居る處に妙な愉快があつて――」

「まあ！」

此處で、世のつねの美しい娘さんならば、意地悪つ、と云つた眼で睨まれるのだが、彼女はそんな場合のコケツトを持ち合せては居ないのだつた。

「情けないことに、縁談もありますの」

と云ふ返事だ。

縁談のあることを情けなく感じなければならぬ彼女、好きな人には傍へ寄つて貰つてはならない彼女、處女であり乍ら、その明朗な潑刺さは持ち乍ら、何かしら人生から第一撃を受けてしまつた人のやうに、何處かに、可憐なつゝましさと淋しさのあるのは、何か譯がなければならぬのだ。

本當なら、もう戀愛の二つや三つのセクションは飛び越して來た頃の彼女。

私は、彼女が陽を仰いで、まぶしがつて居る顔に、吸ひつけられるやうに見入り乍ら、その美しい瞳の奥に、かくされてあるものを掴み出さずには置かない——そんな、妙な決心をしたものだ。

## 双面の肌

誘つても、容易には應じなからう、と思つた彼女は、案外に簡単に私の部屋を訪れた。

千金の春宵である。さゞめきの聲、絃歌、そんなものを背景にして、私は美しい彼女から一體、何を聞いたらう？

「私程、恵まれない人間もありませんわ」

「ほう？」

私は呆れざるを得なかつた。さう笑つて居る彼女の容貌だつて、素晴らしいものではないか、まして、こんな、のんびりとした水郷に育つて、生活難も知らなければ叡智も恵まれて學問の愉快さを味つて來た人ではないか、へん、この人にして、こんな氣障な謙遜があるのか——と私のつむじは、ひん曲らうとすらししたのである。

だつて、あたし、感激を経たれて居るのですから」

「感激を——」

「さうなんです、だから、戀なんて出來ませんし、結婚だつて、始めは、どうしたつて感激の

シーンを随分経なければ平靜な生活にはなりませんものね、だから、結婚も出来ないんですの」  
私は首をかしげた。

「どうも判らんですな、感激することが一切出来ない、なんて、それは、あなた自身の伶俐な冷たさを仰つしやらうと云ふんですか？」

「いゝえ、あたし、そんな街氣なんか御座いませんのよ」  
不機嫌らしい面色である。

「失禮、ちや、一體、どうして、そんな事を仰つしやるのです？」

「恵まれないのですよ、おほい」

半ば、自棄とも見える笑ひである。妖しい迄に美しい。

「あなた、女の生命は何だと思召します？」

「さあ」

「玉の肌、さうでせう？」

「それもありますね」

「それなんですの、あたしは——」

「さう聞いて、私は改めて、彼女の肌を見た。白い、きめの細かな、豊かな頤の線、それから咽喉の邊りの、何とも云へぬセンチユアルな味覚！

又しても巧妙な誇りか——と私は唾を吐きさうになつたとき、彼女は、何かを直感したか、口惜しさうに、涙さえ、黠し見せて、

「その肌が、あたしは、人間並ぢやありませんのよ」

と云ふのである。

不思議に彼女は青春期へ入ると、それまで滑らかであつた、その肌が、半歳毎に、自分自身で手を觸れても、氣分の悪い皴肌となるのを知つたのだ。始めは皮膚病に冒されたのだらう、

と思つて醫者にも診て貰つた。何のこともない。そのうち、肌が素通りになるであらうと、クリム、化粧水、あらゆる手を盡したがなか／＼以前通りの肌にはならなかつた。

全く悲觀してゐると、びよつこり、半歳振りて滑らかな肌に戻つた。

「あたし、その時の嬉しさを、まだ忘れませんの、晝風呂へ浸つて居まして、ふと、手で、無意識に撫で、見ましたの、すると、どうでせう、まるで他人の身體のやうな、何とも云へぬ滑らかな感觸でせう、はつ、と思つて、陽にあたしの肉體を透してみましたわ、すつかり、すつかり、あの醜惡な皮膚面の無数の小突起が、いつの間にか消え失せて、昔の誰れにも恥づかしくない、あの肌——え、あたし、その時、洗ひ場に、踏つて、嬉し泣きに泣きましたの」

と瞬間、彼女は時れやかな顔をしたが又、忽ち眉を擧めて、

「でも、も一度、氣付いた時には、又、以前の通りの醜い皮膚になつて居たのです、あたしは今度は、そんな夢のやうな一瞬の喜びを興へた神を呪つて、泣きました。

無理もない、と私は思つた。癒つた！と思つたのが束の間の夢であつたら、あまりにも残酷すぎる夢だ。

處が、彼女は、又、その翌日、晝風呂に浸つて居て、確かに肌の感觸が舊に復したのを覺えた。

が、今度は感激しなかつた。むしろ、呪ふやうに、以前と同じ感觸を自分の肌に感ずる神經を嚙つてやつたのである。

すると、何と云ふことか、それから、すつと、半歳の間、玉の肌は、何處迄もそんな醜惡な小突起が無数にあつたとは思はれない滑らかさ、艶脂の匂ひ床しく續いたのである。

「あたし、すつかり朗らかになつて、それこそ人並みに戀を追ふても見たい氣にすらなつたのですの、それが何と云ふ呪はれ方でせう、又しても或日、びよつこり、鮫肌に戻りましたの、それからと云ふもの、あたしは、顔や首あたりの皮膚こそ變りませぬが、それ以外は、いやな

「鮫肌に半歳づゝ、きつとなりますのですから、あたし、結婚などは思ひも寄りませんの、すると此の話を聞いた同性の先輩が申しましたわ、では仕様がなから、その玉の肌の半歳間に、せいぜい、思ふ存分、戀をなさい、さもなければ鮫肌の半歳間は別居出来るやうな結婚をなさいつて、ほゝ、でも、そんなことをしたつて、何月何日から、さうなると決まつて居るものではありませんし、男は、戀は、愛情は、一瞬の動機に變化するものでもね、それに――」

すつかり、黙り込んでしまつた私の顔を、彼女は、眞正面から覗め續けて、  
「すつかり、駄目ですわ、あたし、飛び立つやうな嬉しさや、絶え入るやうな悲しさを感じる、矢張、肌が、すつかり變化してしまふことが判りましたの、人形のやうに平靜にして居ることだけが、私の肌を人間並みにして居てくれますの、それも一年の中の半分だけ――」  
さうして、ぼとり、涙が膝に落ちたのである。

私は、云ふ處を知らなかつた。たゞ、彼女自身が云つた、人形のやうな平靜な美、發展性のない美を覗め乍ら、處女の魅力を寧ろ悲しく思つた。

「ほゝ、いけませんわ、あたし、すんでのことに禁止區域へ足を踏み込む處だつた――」  
と、つゝましい笑ひを残して、ものごしだけが颯爽として、彼女は出て行つたのである。

### 恐怖の對象

關釜連絡船、景福丸の三等船室である。

釜山から、下關への航路だつた、丁度一夜の海上生活乍ら、船は多くの哀愁を伴ふものである。

が、しかし、それが感じられるのは一等、二等の船客だ、三等船客は、何と云つても騒然、雜然、喧しくつて、旅愁など、何處かへ吹き飛ばされて居る。

ごろり、と寝ると、直ぐ、眼の前に身體がある。足を、うんと伸すと、誰れかの向脛を蹴りさうだ。

ざこ寝——は京の風流だが、船の三等のざこ寝は、たゞ、重苦しい。

ふと私は、容易ならぬ、無禮を敢てして居るのに驚いた。

確かに、淑女の鼻つまきへ、私の旅に汚れた足が、にゆつ、と出て居るのだ。

「や、こりや——」

その婦人が、細く眼を開いて居るのを知つて、私は慌て、起きた。

「済みません」

と軽く挨拶して、さて、部屋中に、まだ低迷して居る煙草の煙を一渡り見廻して、今度は、頭と足を向きを變へて、私は、ごろりと横になつたのである。

「あら、いけません、どうぞ、あちらへ頭をやつて下さい！」

神経的に、穩やかだが、何か叱責するやうな口調である。

「えつ？」

私は驚いて問ひ返した。

「足がいです、足がつ！」

早口で、その若い婦人は云ふのである。

「でも、そりや、失禮ですから——」

「いゝえ、お願いですから、でないとおたしは起きてしまひますわ」

と險しい眼である。

「はあ」

と答へたが、さりとて、私は此の場合、その婦人の云ふ通り、足を、にゆつと婦人の顔の前へ投げ出して寝る氣になれなかつた。

で、煙草を喫ひに立たう、とした。

「あら、お寢みにはなりませんの？」

婦人が、むつくり、身體を起した。

「だつたら、あたしも起きますわ」

妙な女だな——と私は改めて、その婦人を見直した。

質素な、無雑作な身姿ではあるが、美しい何處となく、初々しさのある婦人だ。

「どちらへ、いらつしやいますの？」

その婦人が、懐し氣に聞いた。

「東京へ歸るのです」

理由もなく、私は、いら／＼した調子で答へた。

「東京？ さうですか、あたしは福岡へ行きますの」

それを聞いて居るうちに、私は又、妙に、此の年若い婦人に、いた／＼しい氣がして來た。

「お一人？」

「はら」

素直な性質らしかった。

「あたし、逃げて行くのですよ、おばさんの處へ、でも、あたしを戀しがつて居る人が追つ驅けて仕様がありませんし、家では結婚を強いられますから——」

「その、結婚が、おいやなんですか」

愚問だ——さう思ひ乍ら、話の接ぎ穂に、私は云つた。

「いゝえ、でもありませんけど——」

婦人は、含羞んで居る。さう云ふ態度が、何處かに可愛らしさのある婦人だつた。で、私も親しく、

「嫌ひではなかつたら、折角、いゝ縁談を逃げてはいけませんね」と忠告した。

「でも、でも、あたし——」

くしゆつと、音がしたかと思ふと、その婦人は、袂を眼にあてゝ居た。

啜り上げて居るのである。

前は、夜の海の甲板である。私は、此の女性が突發性ヒステリーであつては敵はない、と思つて、咄嗟に、その肩へ、手をかけて、

「どうしたんですつ？」

と顔を覗き込まうとした。

「とたん、私は、びしゃつ！ と横面を、はり飛ばされた。」

「顔はいやつ！ 顔はいやつ！」

駄々つ子のやうである。

私は驚いて飛び退がつた。

すると、婦人は、涙を拭つて、

「お許し下さいまし」

と詫びた。

「いゝや」

私は、もはや、對手にはなるまい、と思つた。

で、一步、二歩、船室へ歸らうとした。

「あの、あたしが、足を向けて下さいとお願ひした譯を申し上げますわ」  
婦人は追つ掛けて、さう云ふのだ。

私は、不機嫌に突立つて居た。



「あたし、悲しい病がありますの、それは顔が、怖ろしいのです」  
 この婦人の云ふのには、顔は、人間の顔は、相當な距離を置いて眺めると何の不思議もないが、近接して、網膜に大きく寫ると、これ程、グロテスクな、怖ろしいものはないと云ふのだ。  
 「あたし、それこそ始めて、戀人が、あたしに接吻しやうとしたことがありましたの、それ迄顔の怖ろしさなどあまり考へたことはありませんでした。それが、お恥かしい話ですけど、そのあたしの戀人の顔が、あたしに、ぐつと接近して來た時、あたしは、その何とも云へぬ怖ろしい顔に、呀つ！ と叫んだきり、腦貧血を起して倒れてしまつたんです、それからと云ふものあたしは、自分の顔を、鏡の直ぐ前で大きく見るのも怖ろしくなつてしまひましたの、お化粧だつて、鏡と、すこし離れた處で、いゝ加減にやつて居るので御座います、だから、あたし」  
 「なるほど——」  
 で、私は、すっかり不快な思ひを一掃して云つた。

「戀人があつても、好きな結婚談があつても、逃げねばならないのですね」

「えー」

悲しげに、その婦人は、又しても身を堅くして、泣き出した。

「あ、君！」

私は、氣の毒になつて、又しても接近して慰めの言葉を掛けやうとして、

「あつ、いけない」

氣が、ついて、後退りをした。

## 現實の人魚

「永遠の處女つて苦しいものですね」

文龍が、ふと、こんなことを云ひ出した。

「はゝゝゝ、何を云つてるんだい、處女と藝妓と、何かの關係でもあると云ふのか？」  
口の悪いSが、忽ちホールド・アップしちやつた。

「お氣の毒さま、ほゝゝ」

文龍は、蒼白く笑んで

「ありますのよ」

「へん、君が、その顔で、處女だつて云ひたいのならう、今夜だけのな」

Nも負けずに憎まれ口を叩いた、

文龍は、その方を、ちらり、と見たばかりで、

「あの、聖母マリアつて、本當に處女でしたでせうか？ 永遠の——」

「さあ、そいつは何とも云へないね」

私は、にたりと笑つた。

「でも、何でせう、いくら聖女マリアさまが、神の子をお生みになつたつてお産の苦しみはあつたでせうね」

文龍は、私を、くみし易しと見たか飛んでもない質問を浴せて來た。

「さあ、こりや難問だね、おい、誰れか、聖母マリアの産婆さんの名を知つてないかな？」

「駄目よ、あんなお友達に仰つしやつちや、茶化す計りですもの、あたし、眞剣に、お訊ねしてるんですもの」

なるほど、さう云ふ顔は一生懸命だつた。

「あたし、子が欲しい！」

「産めばいゝさ」

「でも、あたし」

と文龍は、私の無雜作な答へが氣に入らぬらしく、

「永遠の處女なんですから！」

と云つた。

それを聞くと、私は、思はず、持つて居た杯を取り落して、ぶつ、と噴き出した。

「まあ！」

文龍が、酒の、とぼつちりを、いそいでハンカチーフで拭ひ乍ら、不審な顔をして私を睨めた。

「何が、おかしいの？」

「おかしいよ」

「どうして、おかしいの」

文龍は、私に詰め寄つた。

「まさか、あたしが、處女だつて云ふのがおかしいのぢやありませんまいね」

怖ろしく眞剣だ、眼が吊り上つて居る。

「ま、さうでもないがね」

「はつきり、云つて頂戴！」

そろ／＼金切り聲になつて來た。

Sや、Nが、それ見ろ、と云はぬばかりに、にやり／＼笑つて居る。

「いゝぢやないか、そんなこと！」

で、私は、さう逃げた。

「よくはありません」

「難かしいね、子供が欲しけりや産むがよし、旦那が欲しけりや、つくるがよし」

「先生！」

文龍は、私の膝を掴つた。

そして、しく／＼泣き出した。

「どうしたんだ？」

驚ろいて、私は訊ねた。

「いゝえ、もう聞いて頂かなくなつていゝんです」

涙に潤んだ聲だ。

「ま、さう、旋毛を曲げなくつたつていゝさ、君が處女なら處女でいゝさ、な、判つたよ」

「いゝえ、いけません、あたしが、何か、かう處女だつてことを、誇つて居るやうに仰つしや

る、あたし、さうぢやないんです」

「さうか、で、どう云ふのだ」

「あたし、處女でなくなりたい！ さう、願ひ續けて居るんですの」

「おい／＼肩に唾をつけて聞け！」

二人の悪友が、けしかけた。

「立ちませう！」

文龍は、柳眉を逆立て、私を引つ立てた。

さうなると、柔順な私である。一寸間の悪い思ひをし乍ら、立ち上つた。文龍は、私を、一

室へ連れ込んだ。

「眞剣に聞いて下さいな」

「あゝ」

「あたし、處女なのよ」

「さつきから、幾度も聞いたよ」

「信じて下さる？」

「あゝ、信ずるよ」

「そんな、安返事ぢやいやよ」

と、文龍は、不平さうに云つて、

「あたし、情けないかな、永久に處女なのよ」

で、私は、始めて、文龍が何を云はうとするかを悟つた。

「ふん、身體に缺陷があるんだね」

「え、とても——」

しよんぼり、悲しさうだ。

「手術をすれば、いゝだらう」

私は無雜作に答へた。

「そんなんじゃないんです」

「ほう」

「あたし、癩癩なの」

「癩癩？」

私は驚いて文龍の顔を見た。藝で賣つて居る此の妓が、癩癩で倒れたと云ふ噂は聞いたことがなかつた。

「でも、ちつとも、そんな噂聞かないぜ」

「だつて、あたし、普通の癩癩ぢやないんですもの——」

文龍は、赫い顔をした。

聞いてみると、文龍は、所謂、癩癩持ちではないのである。

矢つ張り、文龍の身體も、處女を欲せず、處女で居なければならぬ恵まれないものであつたのだ。

普通の時には、何でもない身體が、いざ、性愛の一步手前迄行くと、文龍は癩癩を起して氣

を喪つてしまふのであつた。そして、愛すべき彼氏の前に馬のやうに泡を吹いた、淺猿しい氣の毒な姿を暴露してしまふのである——と云ふのだ。

流浪線上の處女、ハイヂャンプを欲して、どうにもならない閉ぢられた肉體を顧みる時、彼女等の心の悲しみは幾何であらう。

金に、境遇に、思ふことの叶はない人は多からう、が、それは、ある時期に、ある努力に救はれることもあらう。

が、肉體を閉ざされた現實の人魚は何處に向つて、悲しい扉の開かれるやう、アツピールを發すればいいのか！

## 生き別れの幼なき娘へ

父は、むかし、田岡嶺雲と云ふ人が、生き別れの子に對して、切々の情を綴つた文章を、「むら雲」と云ふ書籍の巻頭で讀んだことがある。

その時の父は、無論、若くて、獨身であつた。が、どう云ふ者か涙が出て仕様がなかつた。まだ妻も迎へず、子も持たなかつた、その時に自然と流れ出た涙は、やがて、お前と、此の父との間の悲しい運命の豫告だつたのだ。神の啓示、佛の顯現とでも云ふものであつたのに相違ない。

そんな不幸な運命に、成つては成らない、さう確く心根を据へるべきであつた。思へば此の父は、その天の啓示を受け乍ら、たゞ簡単に涙して過ぎてしまつた。そして、不幸な運命の前

に、今、首垂れるに當つて、しみじみ、田岡嶺雲の文章を思ひ出した。それを、こんな運命になる一步手前に、何故思ひ浮べなかつたらう。凡ゆる障害を突破して、そんな不幸の來るのを峻拒しなかつたのであらう、父は、まだ若かつた。父は、まだ思慮淺かつた。驕慢でもあつた。或は、お前に對する愛が尠なかつたかも知れぬ。そして、とうとう、こんな運命を甘受してしまつた。

要するに此の父は凡夫でしかなかつた、それが、お前に取つて悲しい事實だつた。父は、永年の間、こんな運命へ導いた、お前の母を憎んだ。怨んだ。しかし、それは情無い凡夫として父の私への責任逃避でしかなかつたことを、よく悟つた。

誰れも悪くはない。生別れのお前は、此の父を憎んでいゝ、怨んでいゝ、とさえ父は考へて居る。さうだ、お前に、私は、今迄に、直接に、何一つとして與へて居ない。與へたものは、お前の夢に通じたか、どうか、父が子への思慕の情だけであつた。

父が、お前を思ひ出す時は、いつも生後六十日のお前の姿である。さうだ、もう今年は九歳になつて居る筈だ、學校へも行つて居るのだらう、それが、父は、生後六十日のお前の姿以後は知らないのだ、お前の事を思ふと臉に浮ぶ乳兒の顔、あれから今日迄の月日、お前の身邊には、どんな事が起き、どんな事が消へ去つたのか、父は氣安めに、坦々とした道をお前が、何の難もなく過ぎた事と思ひ込んで居たい。が、大體、父と生別のお前だ、最初から不幸な運命を擔はせられて居るお前に、大した幸福があらうとは思はれない。辛い、淋しい、悲しい涙も絞つただらう、それに、學校へ行くとしても、お前は私生兒だ、母の私生兒、まだ小學校の生徒である中はいゝ、やがて、成人して、婚期に達した時、私生兒である自分を、お前は、どんなに悲しむか、怨むか、それを思ふと、此の父の心は寂しい。いまわしい、憐れなレツテルを

貼られたお前、しかし、私生児の概念だけは、お前には除外されなければならぬ。お前の私生児だけは、お前の父母の罪ではないのだ、断じて無い。お前の父母が、その各の両親へ、所謂孝養の爲めに、お前を犠牲にしたのである。いや、さうしなければならなかつた、さうされねばならなかつたお前の父母とお前の運命であつたのだ。

お前と生別しなければならなかつたのは、父の意志ではない。お前の母とお前の母の養父母が、此の父に所謂生活力、経済力なし、と見、それから今一つ、お前の入籍を喜ばぬ、同時にお前の母を認めぬ父の両親に絶望して、お前を連れて、お前の母と、お前の母の養父母とが突如、消えて去つたのだ。何も知らぬ父は、やがてはお前達を幸福にしやうと其日も朝早くから勤めに出て居た。そして、夕方、疲れて歸つて來てから、お前達が失踪したことを知つたのだ。

父は、何もない家、何もかも運び出された家の疊に、身を投げて泣いた。そして、血眼で、

お前達を探し廻つた。

——だが、今は、お前と生別の、その事情を云ふのではない。それは、お前が母から聞いた又、お祖父さんお祖母さんから聞いた、そのまゝを信じて居てくれてもいゝと思ふ。たゞ、父は、其後のお前に對する心持ちだけが述べたいのだ。そして、お前の心に、父の愛が、慤しもない、などとの悲しい思ひを取り除きたいのだ。

いや、まだ九歳のお前だ、或は母の第二の夫を父と信じて居るかも知れぬ、又は、或は現在でも獨身の母から、父は死んだものと聞かされて居るかも知れぬ、が、やがて子は、本當の父を、何處かに發見したい本能に驅られるものだ、その時、父は、父の本當の心が知つて貰ひたいのだ、運命の前に投げ出された憐れな父の姿も、お前に、まさしくと正視して貰ひたいのだ。



「お子さんは何人でいらつしやいますか？」

此の質問は人から父が度々受ける。が、その時、いつも、愚圖くした返事をする、何事にあれ、愚圖くした事の嫌ひな此の父が、子の數を聞かれた時に、つと胸を衝かれるのは、お前の存在だ。本當は——と、お前を一人胸の中で勘定に入れ、又、一人引いて、現在、家に居る子供だけの數を知らせる。すると、次に、長女の年齢となる。其處で、父は、又しても答へに迷ふのである。

それから亦、訪問先で、

「お宅のお嬢さま方の、何と可愛い事！」

等と、お世辭を云はれる度に、父は、顔を染める。其處に一人、お前の居ない事が、非常な恥かしさを感じさせるからである。

最初、お前と生別してから、しばらくの間は、お前の握力が堪らない魅力だつた。それが懐

かしかつた。

小さい小さい、玩具の人形のやうな手、それで、此の父の小指の下を、ぎゅつ、と握つた案外に強い力、それが、不思議に、いつ迄も記憶に残つて居た。

大體、お前は、お前の母の養父母に、めちやくちやに愛されて居た。で、乳を貰ふ時だけ母に、それから、此の父に抱かれる事などは殆んどなかつたのだ。それを思ふと、やがて生別の原動力となつた、お前の母の養父母も、此の父は、ちつとも恨む氣にはならないのだ。いや、頭を下げたい。現在此の父の父、今は亡き、お前の父方の祖父が、「見たくない」と迄云つたお前を、離したくない爲めに、將來、多くの重荷であり乍ら、連れて逃げた其の情に、恩愛に、私は父として泣かすには居れぬのだ。今にして思へば、有り難いのだ。お前は、お前の傍近く在つた祖父母には、本當に感謝してくれねばならぬ。

別れの日の朝、別れとは知る由もない父へ、お前の母は、無理に、出勤前の忙しい私に、お

前を抱かせたのだ。その時、お前は、小さい手で、しつかり父の手を掴んだのだ。それが、お前と父との生別の握手だった。何と云ふ迂闊な事であらう、その時、お前の母親の瞳に、涙が泊つて居たに違ひなかつたのだ。それを此の父は見る事が出来なかつた。いや、さうした注意が拂へる程、深い考慮を持つて居たら、恐らく、お前と生別することもなかつたのであらう。それから数年、父は、幼ない女の兒を見ると、何となく、お前のやうな気がしてならなつた。背に負はれて泣いてゐる子を見ると悲しくなり、おできの出来た子を見ると、心配になり絶えず、それに心を煩はされた。

そればかりではなかつた。お前が住む土地、その土地を汽車で通過したことがあつた。此の父は、その土地の近くへ来た時、次々と止まる驛から、乗り込む人の姿に眼を睜つて居た。

「もしか、お前とお前の母が、偶然にでも乗り合せたなら——」  
 こんな事を念じて、頻りと眼を皿のやうにして探し求めたのであつた。そんな偶然がある筈

はなかつた。

やがて、汽車は、其の土地の驛に止まつた。父は、車窓から身體を乗り出して、プラットホームから待合室、さては小驛である爲めに驛前の運送屋まで見通されるのに、油断なく、寸刻の間に、人と云ふ人の姿を全部見廻したのであつた。

勿論、お前も、お前の母も、そんな時に、そんなに好都合に驛近くへ来て居る筈もない事は判つて居る。

列車は動き出した。

が、此の父は、まだ執念深く、田畑に働いて居る人々の顔を注視するのを怠らなかつた。

「お百姓でもないのに——」

田畑に出て居ることがないのは判り切つて居るのだ、だが、然し、別れた後に、どんな境遇が、お前達の前に展開したか知れない、と云ふやうな、何とも云へぬつき詰めた氣持ちだつた。

そして、列車が、二つもの驛を通過した後に、充血した眼を初めて閉じた。と、嘲けるやうに心の隅から、

「若し、それだつても、もはや年を経て居る、子の姿が、列車の中から、どうして判らう」と云ふのが聞えた。全くだつた。記憶は生後六十日のお前の姿だ、立つて歩くやうになつたお前の姿が、どうして私に、ふと見付からう。

「幸福で居てくれ！ 父は、お前が住む驛を今、通過したのだよ、そして、お前の幸福を神に佛に、一心こめて祈つて居るのだよ！」

知らぬ間に、涙が滲み出て居た。

又、その驛を夕暮れ近く通つた時がある。さら／＼ちらと光る電燈、その電燈の何處かの下で、お前が、その母と、そして、あの祖父母と、晩食を執つてゐる、と想像したこともあつた。その夜更などは、列車の中で寝られなくて、食堂車へ行つて酒を啣り乍ら、

「お前は、もう寝たのか知ら？」

ふと、さう思つたこともあつた。

もはや、今年は九歳になつて居る。思ひ起すのは昨年のことだ。

小學校へ入學する爲めに、母親や父親が、かわい／＼入學兒童の手を引いて、三越やほていやへ入つて行くのを、父は新宿で眼にした。その時、

「お前も今年は——」

と思つた。ランドセル、靴、何でも買つてやるのに！ あゝ、買つてやる子のある父母達が羨ましかつた。

これが田舎へ預けてあるのだつたら、買つて、此の父は楽しみに、カナばかりの手紙を書いて送つたらう、それからそれへ、お前との連絡を考へて、父は乗合自動車の中で、ばら／＼涙を、こぼして居たのだ。

それに、悪い事に、お前の生れた時、前後して生れたのが此の父の友人Tの子供だ。

「近頃は腕白になりましたよ、は、學校へも行きます」

と、Tから消息を聞いた時だつた。あの頃、Tの妻は、帯さへなくて、細帯一つの貧乏新聞記者の世帯を張つて居たのだ。それが、Tは今東都で相當鳴らした記者となり、其の子は學校へ行く。

「一度遊びに来て下さい」

かう云ふTの家へ、此の父は、どうしても遊びには行けなかつた。何故？ お前と殆んど日を同じうして生れた子の、生ひ立つた姿を、平氣で、此の父が、見られるか！

「どうして居るだらう、まさか死んでは居まい」

夏の魂祭りでもあると、すぐ、さう思ふ。

魂送りする人の氣持ちは、まだ安らかだ、が、生死を知らぬ生別の子を思ふ父の心は、何に

何處に安住を求めたらいいのか。

道で、子供が倒れて居る、それが九歳位の子だと、私は走つて行つて抱き起してやる。

「お前も、何處かで、誰れかに、抱き起されて居るかも知れぬ」

さう思ふ、父の小さい陰徳なのだ。お前へ響け！ と祈る、はかない陰徳なのだ。

「納豆いらな」

尋常一二年の女の子が、時折、此の父の家へ納豆を賣りに来るのだ、と、その聲を耳にする

と、此の父は、直ちに、

「買つてやれ！」

大急ぎで、妻に命ずるのだ、時には、金がなくて弱る日もある。そんな時には、此の父が出